月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.23



jdk バンドボーカル・コテカナが試練に挑む
コテ放題♥

ドット絵って良いものですよ…ね!?
みんな集まれ！ファルコム学園

お気楽刑事レイモンドの受難!?
英雄伝説　零の軌跡 ～午後の紅茶にお砂糖を～

物語は最後の戦いへ――!!
空の軌跡外伝 レーヴェ物語

学園を巡る怪事件の結末は?!?
英雄伝説 空の軌跡 リベール王国スナップショット

啄木鳥しんき
イラストメッセージ

最新作『閃の軌跡』の発売が決定！
ファルコムニュース

ファルコム jdk バンド ドラマー・オカジの
人生半キャラずらし

ティオのファルコムラジオ めんどくさいです…でもがんばりますの舞台裏

『零えぼ』の開発秘話が明らかに？

巻頭特集 株式会社ピラミッド　代表取締役

中野賢氏インタビュー



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

『零えぼ』の開発秘話が明らかに？
巻頭特集 株式会社ピラミッド 代表取締役
中野賢氏インタビュー



『那由多の軌跡』、『イース セルセタの樹海』、『英雄伝説 零の軌跡Evolution』、『英雄伝説 空の軌跡FC：改HD EDITION』と、怒涛の新作ラッシュとなった2012年。今回は、『零の軌跡』のイベントフルボイス版として角川ゲームスより発売されたPS VITA専用ソフトウェア『零えぼ』の、開発を担当した株式会社ピラミッドの中野社長に『英雄伝説 零の軌跡 Evolution（以下、「零えぼ」）』の開発秘話を伺ったぞ！

より進化した『零の軌跡 Evolution』

——『零えぼ』の開発を担当されるようになった経緯を教えてください。

中野賢氏（以降　中野　敬称略）：（ファルコムとともに『零えぼ』を企画・制作した）キャラアニさんは、もともとファルコムさんのドラマCDなどを製作しており、その中でキャラアニでもファルコムさんから権利許諾を得て、ゲームを作れたらいいよね、という相談を受けたのが一番最初でした。それが『零』の発売と『碧』の発売の間ぐらいの事だったと思います。その頃にちょうど、PS VITAが発売されるという話がゲーム業界で出てまして。PS VITAであればフルボイス版が作れるということもあり、どういう形で作っていこうかという話になりましたね。その後はファルコムさんの監修の元、クライアントのキャラアニさんと二人三脚で開発に進んで行きました。

ファン、一開発者から見たファルコム作品

——少しお話は反れますが、ファルコム作品の魅力についてお聞かせください。

中野：ファルコムさんはRPGをたくさん作られていますよね。僕の中でRPGって、やっぱりストーリー性というのが作品にのめり込める、込めないの大きな要素なんですよね。『零えぼ』もやはり読み応え、聴き応えがありましたし、新作が発表される度に、そこは毎回楽しみにしています。もちろんBGMやOP、EDも大きな魅力だと思います。あとは戦闘システムですね。僕自身、ゲーム開発会社の人間ですが、ゲームがものすごく上手いというわけではないので、戦闘に複雑なシステムや要素が含まれていたりするものが苦手なんですよね。その点、ファルコムさんの『軌跡』シリーズって、とてもわかりやすくてバランスのいい戦闘システムになっているんです。それに加え、これは先ほどお話した魅力的なストーリー性というところから来るのかもしれませんが、コンビクラフトやチームラッシュなどがあったりして、プレイしていてとても楽しいです。開発作業の終盤には、デバッグ作業とは別に、僕自身も2周クリアをしたのですが、イベントフルボイスということもあり、思った以上の時間をプレイしていたと思います（笑）。

——本題に戻りまして、今回、プラットフォームがPSPからPS VITAに変わることになりましたが。それをどのように『零えぼ』に活かしていこうと思われたのでしょうか。

中野：PSPとPS VITAの一番大きな違いは、PS VITAにネットワーク環境が付いたということですね。ですが、『零えぼ』はRPGなので、ここを伸ばす形ではないだろうと。しかしネットワーク環境以外にも、両面タッチパネルやモーションセンサーなど、多くの機能が追加されたので、こちらはゲーム内に取り込んでいこうと思いましたね。しかし、決してゲーム進行に妨げのない形で、と思いましたので、通常プレイ時の操作というよりは、メニュー周りやミニゲームという形で盛り込んでいこうという方針になりました。

——『零えぼ』は『零』の移植版ということになるかと思うのですが、移植作業というのはどのような作業なのでしょうか。

中野：移植作業とひと言でいっても、もともとのゲームを弊社で作って、それを違うプラットフォームに移植するという作業と、人様の作ったゲームを移植する作業というのは全然別物なんで

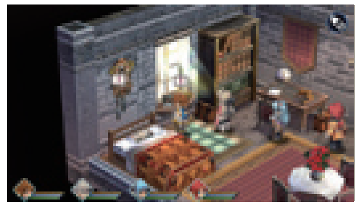


すよ。なぜなら、自分たちで作っているものだったら、中の仕組みが100%わかっているわけなので、どこをどのように変換したら他のプラットフォームでも動くのかというのが予想がつくんですけど、人様のプログラムだとそこいじってしまうとバグが出てしまうという危険性があるんですね。ですから弊社の方針としては、ごく簡単に言うと、もともとのプログラムを土台ごと別のプラットフォームに移動するということですね。その上で、元のプログラムがきちんと動くかを検証していこうと。その検証をした後に新しい追加要素を組み込んでいこうということになりました。

――追加要素というと、イベントフルボイス化やミニゲーム、音楽のフルアレンジや、ムービーシーンの一新など、多岐に渡りますが、特に印象に残っていることや、苦労されたことはありますか。

中野：印象に残っていたり苦労した点はいくつかありますが、音楽のフルアレンジという点で言うと、これは我々ではなく本家のファルコムさんにやっていただきましたからね。なので、ファンのみなさんには申し訳ないのですが、発売より先に聴けたというのは、ワクワクしましたね（笑）。

苦労した点でいうとミニゲームです。といってもプログラムで苦労したということではなく、どのようなものであれば新しい機能を活かしつつもファルコムさんらしく、ゲーム内で違和感なく遊べるようなものになるかなと考えた点ですね。たとえば「ころころみっしぃ」ですが、ただボールが転がるだけでは「らしくない」んですよね。そこで、「みっしぃ」が中に入って転がると、おもしろいかなというように考えたりしました。





あとは追加の支援要請ですね。これは我々というよりもシナリオライターさんがすごく大変だったと思うんですけど、ゲームそのものを本当に理解している方なので、元からあったんじゃないかという出来映えのものを上げていただいたので、それはすごくよかったと思います。今回追加された支援要請の中で、ティオが「ある姿」になるものがあるのですが、あれはシナリオの完成後、ファルコムさんに描きおろしていただきました。

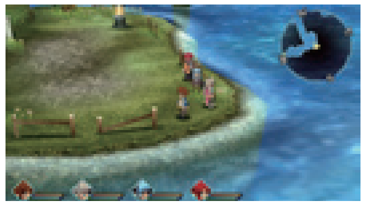


一定の条件を満たすと、ティオのレアな姿を見ることが出来る！

あとは、今回イベントフルボイスになり、かなりしゃべるようになったので、目パチ口パクを追加しました。もともとのPSP版の時点で、シナリオ毎に表情が変わっていたのに、追加しないわけにはいかないだろうと。ただ、目パチ口パクは当然表情ごとに作っていくので、かなりのパターンが必要だったので、現場のスタッフは大変だったと思います。

グラフィック面で言うと、プラットフォームが変わったことで高解像度化されたことはもちろんなのですが、ほかにもPSP版では容量の問題だったのかと思いますが、キャラの影が丸影だったので、これをキャラの影にさせてもらいました。あとは水や光の表現ですね。クロスベルは何かと水源や光源が多いので、その辺りをリファインするとより良くなるかなと。テクスチャ周りはこうした方がよりファルコムさんらしいクオリティになると思い、キャラアニさんやファルコムさんには、事後承諾を得る形で、こちらの方でやらせていただいていた点ですね。最初はHD化にあたってリファイン作業を現場の人間に指示していたのですが、上がってきたらよりパワーアップされたものが出てきた、ということです（笑）





開発が終わり いよいよ発売を迎え

――発売後、開発会社はどのようなことをされるのでしょうか。

中野：開発会社は普通であれば、クライアントに納品した後は次の仕事に取り掛かることがほとんどなのですが、PS VITAにはライブエリアというネットワーク機能が搭載されていて、その更新等は随時行えますので、『零えぼ』に関しては現在でも携わらせていただいていますね。

――最後にファンのみなさんにメッセージをお願いします。

中野：我々がもし次にファルコムさんの作品に携わらせていただくことがあれば、それはまた、キャラアニさんを通してということになるかと思います。もしその機会が再びあれば、もちろんできるできないということはあるのですが、「こういう要素が見てみたい」ということがあれば、キャラアニさんにどんどんとメッセージを送って欲しいですね。ピラミッドとしても可能な限り実現できるよう頑張っていきたいと思いますので、よろしくお願いします！

英雄伝説 零の軌跡 Evolution

▶11月16日より、さらにプレイしやすく機能を拡張したアップデートファイルを配信！

■対応機種：PlayStation®Vita
■発売日：発売中
■ジャンル：ストーリーRPG
■発売元：角川ゲームス
■CERO：B（12才以上対象）

■価格：【PlayStation® Vita カード版】6,090円（税込）
【ダウンロード】5,040円（税込）
【限定版】7,980円（税込）
【キャラアニ限定BOX】9,800円（税込）



英雄伝説 零の軌跡 ～午後の紅茶にお砂糖を～



著：むらさきゆきや
イラスト：窪茶

第9話『フランとマフィアとラーメン屋台』

クロスベル警察に新設された特務支援課は、市民からの支援要請を受け、それを解決することを目的としている。

市民との窓口になってくれているのが、フラン・シーカーだった。

「あ、ロイドさん！」

カウンターのなかで書類を整理していた少女が顔をあげ、親しみのある笑みを浮かべる。

ピンクブラウンの髪をツインテールにまとめ、ちょっと間延びした平和そうな声をしている。

名前を呼ばれ、ロイドは片手を挙げた。

「やあ、近くまで来たから、報告に寄らせてもらったよ」

ロイド・バニングスは特務支援課のリーダーだ。

他の仲間たちも来ている。

フランが笑みを向けて。

「皆さんも、お疲れ様です～」

特務支援課の面々が、それぞれに返した。

ロイドは済ませたばかりの支援要請について報告する。

「――というわけで、それほど大変じゃなかったよ。他に要請は来てるかな？」

「はい。緊急というわけではないですが、街道に大型の魔獣が出たそうです。余裕があれば、お願いします」

「わかった。今から行ってみるよ……最近、こういう要請が増えてきた気がするな。魔獣が増えてるのか？」

「そうですね～。前は特務支援課が有名じゃなかったから、街道の魔獣とかは警察じゃなく、遊撃士協会（ギルド）とか、警備隊に相談してたんじゃないでしょうか」

「ああ、そうかもしれない。知名度が上がってきて頼ってもらえるようになったなら、いいことだな」

「本当ですね。わたしも受付として、嬉しいかぎりです～」

ロイドたちが会話を切り上げようとしたとき、ちょうど別の警察官がやってきた。

捜査官のレイモンドだ。

金髪の青年で、柔和と軟派の間くらいの笑みを見せる。

「おや～、特務支援課の皆さんじゃないか。おひさしぶり」

「こんにちは。レイモンドさん」

ロイドが挨拶すると、仲間たちも会釈した。

「君たちも、たまにはどうだい？」

レイモンドが口元でグラスを傾ける仕草を見せる。

ロイドは少しだけ考えて。

「飲み会（パーティー）ですか？」

「そう！　まぁ、未成年者もいるから食事会（パーティー）だけどね。警察署内の親睦を深めようってことで、捜査二課のメンバーが中心だけど、他の課も大歓迎だよ～？」

「なるほど……お誘いは嬉しいんですが……たった今、支援要請を受けたところだもので。すみません」

「ああ、そうなのか。支援課、すごく頑張ってるみたいだね」

「困ってる人たちの役に立ててるならいいんですけど」

「街の外の魔獣まで退治するんだって？　支援課って本当に何でもやるんだね」

「はい。支援要請を受ければ……だから、今日は街に戻るのが遅くなるかもしれないので」

「そういうことなら仕方ないな～」

レイモンドが視線を転じて、フランのほうへ声をかける。

「フランちゃん、今夜、どう？」

「残念ですが、今日は先約があるんです！」

申し訳なさそうにしつつも、先約って言葉のあたりで、にんまりと表情が緩んでいた。

頬を染めたりして。

レイモンドが目を丸くする。

「ありゃ……なんか、すっごく嬉しそうだね。も、もしかして、フランちゃん、恋人ができちゃったりしたんじゃ⁉」

「あはは、そんなのできませんよ～」

ぱたぱたと彼女は手を左右に振った。

「それじゃあ、先約って？　あっ、いや、話せたらでいいんだけどさ」

「べつに隠すことじゃなくて、今夜は、お姉ちゃんとデートなんです！　うふふっ」

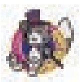
「ああ……」

レイモンドが疲れた顔をして肩を落とした。

聞いていたロイドも汗をたらす。

いつも笑顔がかわいいフラン・シーカーは警察署内でも人

気の婦警さんだ。
　しかし、自他ともに認めるお姉ちゃん大好きっ子であり、警察署内に知らぬ者なしというほどだった。
「まぁ……フランちゃんは、そうだよね……」
「そうですよ〜」
　レイモンドのぼやき声に、フランが嬉しそうにうなずいた。
　そのとき、受付に導力通信が入る。
　手が空いていた同じ受付嬢のレベッカが受話器を取った。
「こちらクロスベル警察…………はい……はい。ただいま替わります」
　レベッカが、フランに受話器を差し出してきた。
「え？　わたしですか？」
「はい」
　受話器を受け取り、耳に当てたフランが、ひときわ表情を明るくする。
「お姉ちゃーん!?　なに？　どうしたの？　今夜が待ちきれなくなっちゃったの？　わたしも待ちきれないよ〜」
『………ごめん、フラン』
　かすかに導力通信ごしの声が漏れてきた。
　フランが愛してやまない姉のノエル・シーカーの声だった。
　ただし、いつもは凛として明るい彼女が、なにやら暗い声をしている。
『……急な任務が入っちゃって』
「えっ!?」
『この埋め合わせは、次の休暇に絶対するから。ごめんね！』
「お、お姉ちゃん、待って！」
『もう集合の時間なの！　それじゃ――』
　逃げるように導力通信が切断された。
　どうやら、今夜のフランのデートはキャンセルされてしまったらしい。
　固まっている彼女の手から、レベッカがそっと受話器を取り、導力通信機に戻した。
　何事もなかったかのように。
　いつもクールなレベッカである。
　逆にいつも賑やかなフランが、らしからぬ脱力っぷりで、つっぷす。
「うわーーーん!!」
「……なんと言っていいやら」
　ロイドは困ったように頬をかいた。
　仲間たちも肩をすくめて、弱り顔だ。
　ノエルは警備隊の曹長であり、まだ若いのに実力を高く評価されている。急な任務が入るのも信頼されていればこそだった。
　わかっているから、ノエルを悪くは言わないフランだったが、すっかり落ちこんでいた。
　重たい空気に耐えかねて、レイモンドが逃げだそうとする。
「あ〜そうだ、報告書を出しておかないといけないないんだ。それじゃあ！」
「レイモンドさん！」
　フランに呼ばれて、足を止めた。
「え、えっと……なんだい？」
「わたし、今夜、行きますから！　食事会（パーティー）！」
「え？　あ、ああ、そう!?　じゃあ、六時になったら声かけるよ」
「はい。もう嫌なこととか忘れて楽しんじゃいましょ〜」
　ぐっと拳を握る。
　切り替えが早いというか。前向きだなあ、と感心するロイドだった。



　ちょっとラッキーだったかな――とレイモンドは思っていた。
　ノエルの都合がつかなくなったのは、フランには残念なことだったが……おかげで、人気者の彼女を誘えたのだから。
　フランは物腰がやわらかくて話しやすいし、なにかと気が利くし、なんといっても美人だ。
　親睦のための食事会は華やいだ雰囲気になり、楽しい時間を過ごすことができた。
　予定を二時間ほど過ぎて解散となったものの、盛り上がったからと思えばなんでもない。
　繁華街のレストランから出ると、すっかり周りは暗くなっていた。
　上司のドノバン警部が声をかけてくる。
「おい、レイモンド」
「あ、はい。なんですか、警部？」
「フランを送ってやれ。どうも、酔っ払ってるみたいだから」
「えっ!?　フランちゃんは未成年ですよね!?」
「グレープフルーツジュースを注文したが、店員が間違えてカクテルを出しちまったらしい。気付かないで飲んじまうなんて、フランらしいけどな」
「あらら……まぁ、飲み慣れてないと、逆にわからないですよね」
「それに、いくら警察官といっても、こんな夜更けに女の子をひとりで帰すもんじゃないからな」
「僕が送るんですか？」
「まるっきり逆方向ってわけでもないだろ」
「たしか、東通りでしたっけ？」

「じゃあな、任せたぞ。俺は仕事が残ってるから警察署に戻る」

「えっ!?　もう真っ暗ですよ」

「日が昇るまでには終わるだろ。それとも、おまえが書類を片付けてくれるってのか？　そうしたら、俺がフランを送っていくが」

「フランちゃんを送っていきます！」

「うむ」

その彼女はどこにいるのか、と左右を見渡すと、ふらふらとおぼつかない足取りで、帰っていくところだった。

よりによって治安の悪い裏通りへ！

「わわっ、待った！」

追いかけていって、腕をつかむ。

彼女はいつもの笑顔を向けて。

「ん～？　あれ～、レイモンドさん？」

「フランちゃん、この時間に裏通りはマズイよ。行政区のほうから回ろう」

「あはは、そうですね！」

彼女は鼻歌まじりに歩きだす。

間違えて一杯だけ飲んだらしいが、けっこう酔ってるなぁ――と思いながら、レイモンドは並んで歩いた。

足取りはしっかりしている。

妙に上機嫌に見えるが、たまに受け答えがおかしかった。

行政区から中央広場に港湾区に出たところで――

「ラーメン食べたい」

フランがつぶやいた。

「え？」

「ほら、あそこに屋台がありますよ、レイモンドさん」

「本当だ。こんな時間でもやってるんだね～」

「これはもう、行くしかありません！」

言いながら歩いて行く。

「ちょ……ちょっと待ってくれよ、フランちゃん」

「え～、なんですか？　いいですよ、わたしだけ食べていきますから、レイモンドさんは先に帰ってても」

「そんなことしたら、僕がドノバン警部に怒られちゃうよ」

「それじゃ、仕方ありませんね～」

「わかってくれたか」

「ふたりでラーメン食べていきましょう！」

「譲らない!?」

やっぱり、彼女はちょっと酔ってるみたいだった。

ひとりにはできないので、レイモンドは観念して夜のラーメン屋台に向かう。

暖簾をあげて、フランが中央の席に座った。

「こんばんは～」

「へイ、らっしゃい」

「ラーメンください！」

「ふたつ？」

店主に尋ねられて、彼女の左隣に腰掛けたレイモンドはうなずいた。

「はい。できれば、すくなめで……」

横合いから、野太い声が割りこんでくる。

「大盛りだ！」

デカイ男だった。

暖簾をくぐるなり、注文し、同時にレイモンドの左側に腰掛ける。

角張った顔と、普通の男の倍くらいありそうな肩幅。

背広を着ていてもわかるほどの筋肉。

レイモンドは目を丸くした。

（……!?　こ、この男は……!?）

ガルシア・ロッシ！

自治州クロスベルで一番の勢力を誇るマフィア《ルバーチェ商会》を取り仕切る巨漢の若頭だった。

かつては猟兵として戦場で勇名を馳せ《キリングベア》の異名で呼ばれた男だ。

捜査一課でトップクラスの要注意人物に挙げられているガルシア・ロッシ。

その隣でラーメンを食べることになるとは。

店主が「へイ、大盛りひとつ」とうなずいて料理をはじめる。

レイモンドはかつてないほど背筋に冷や汗をかいた。

フランが楽しそうに笑う。

「あはは、大盛りだなんて、すごいですね～」

「ん？　ああ、忙しくて飯を食べる暇もなかったんでな」

縮こまってるレイモンドの頭越しに、上機嫌なフランと、キリングベアが会話していた。

レイモンドは心臓が止まるかと思った。

（まさか、フランちゃん、気付いてないのか……!?）

「おじさん、熊さんみたいに大きいですもんね～」

レイモンドは気を失うかと思った。

あのガルシア・ロッシを〝おじさん〟呼ばわりで、しかも〝熊〟である。

たしかに、熊のようにデカイが。

この熊は人食い熊だ。

ガルシアは鼻を鳴らして。

「フンッ……おじさんかよ。まだ老けこんだつもりはねぇが」

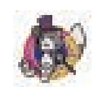
「そうなんですか。おいくつなんですか？」

「42歳だ」

「じゃあ、わたしから見たら、おじさんですよ～。お父さん

と同じくらいですから！」
「ほう。嬢ちゃん、幾つだ？」
「今年で17歳になりました～」
「25も離れてるのか……まぁ、たしかに、おじさんだな」
「うふふっ……お父さんが生きてたら、こんな感じだったのかな～」
　レイモンドは黙って首を横に振った。
　いくらなんでも、キリングベアと同じ巨漢が、そうそういるはずもない。
　ガルシアが声を小さくして。
「そうか……父親を亡くしてんのか。そいつは、寂しいやな」
「あ……はい……でも平気です！　お姉ちゃんがいますから。わたしのお姉ちゃんは、すごいんです。警備隊の曹長なんですよ」
「ほう？　そいつは頼もしいな」
「わたしのことも、クロスベルの街も守ってくれるんです。悪い人なんか、やっつけちゃいますよ～」
　フランが拳をにぎって、ぶんぶん振り回す。
　ゴッとレイモンドの頭に当たったが、気付いてない様子だった。
　ガルシアが獰猛な牙を見せて笑う。
「ククク……そいつは、本当に頼もしいな」

　レイモンドは内心で悲鳴をあげていた。
（早く帰りたい！）
　ラーメンのいい匂いがしてきた頃、四人目の客が現れた。



「お隣、よろしいでしょうか？」
　暖簾をくぐり、フランの右隣の席を指さしたのは、細面で眼鏡をかけた青年だった。
　切れ味の鋭いナイフのような印象。
　フランがにこやかにうなずく。
「はい。空いてますよ～」
「どうも……」
　レイモンドは目を皿のようにして見つめた。
　肩が震える。
　屋台の明かりに照らされた青年の顔に、はっきりと見覚えがあった。
　ガルシア・ロッシと同じく要注意人物としてファイルに載っている。
　東方風の意匠を施した服装からしても間違いないだろう。
（ツァオ・リー⁉）
　共和国の東方人街に本拠地を構える巨大犯罪組織《黒月(ヘイユエ)》の幹部であった。
　屋台の店主が尋ねる。
「らっしゃい。なんにしましょ？」
「ネギラーメンをひとつ」
「ヘイ、ネギラーメンいっちょ。もうすぐ出来ますんで」
「はい」
　フランが嬉しそうに声をあげる。
「うわ～、美味しそうな匂いがしてきましたね。これこそ、ラーメンですよね！」
　話しかけられて、ツァオは一瞬だけ意外そうな顔をしたが、微笑んでうなずいた。
「ええ、私の祖国とは味付けが違いますが、食べてみると、これがなかなか。今では、すっかり常連です」
「おおっ、楽しみですね～。わたし、今日が初めてです！」
「なるほど……お仕事のお帰りですか？」
「はい！　あっ、パーティーやった後なんですけどね。もうすぐクロスベル創立記念祭じゃないですか」
「ええ」
「警察は警備で忙しくなるから、今のうちに騒いで、やる気を出しておこうって感じなんです」
「なるほど……警察の……そうですか」
「知ってますか？　最近、また悪いトコが増えて、もう大変なんですよ～」
　レイモンドが声にならない悲鳴をあげる。
　その〝増えた悪いトコ〟のボスが、今、フランの横にいるツァオだ。
　当人は気付いているだろうに、笑みを崩さない。
「ふふっ……すぐに片方は消えると思いますよ」
「だといいんですけどね～。まぁ、みんな、記念祭を楽しみにしてるから、平和だといいんですけど」
「とても楽しみですね」
　ツァオが含みのある表情を浮かべた。
　視線を横に流す。
　フランとレイモンドの向こう──ガルシアが不敵な笑みを返した。
「片方が消えるか？　そうだろうな。この街は、共和国のようにはいかねえってことだ」
「井の中の蛙は大海を知らず、といったところですね」
「てめぇ……」
「フッ……」
　キリングベアと《黒月(ヘイユエ)》幹部の緊張が高まる。
　そこに、どんぶりが出てきた。
「ヘイ、ラーメンお待ち！　お嬢ちゃんのぶんと、お兄ちゃんのぶんと、旦那が大盛り。お兄さんがネギラーメン」



「きった～～～!!」
　フランが両手を挙げてバンザイした。
　気勢を削がれ、ガルシアもツァオも闘気を収めた。
　屋台の割り箸は、木製の箸箱に入っている。
　普通の店のような筒に収めた形だと、砂埃などが溜まってしまうからだ。
　その蓋付きの箸箱に、ガルシアとツァオが同時に手を伸ばした。
　互いに端をつまんで睨み合う。
「ククク……俺が先に掴んだようだぜ？」
「ご冗談を。先だから、なんだと言うんです？　より強い者が次代の覇者になるのですよ」
「そうか？　じゃあ、残るのは俺のほうだな」
　レイモンドは双方の闘気に押しつぶされそうになる。
　呼吸さえままならない。
　今、この場所から、クロスベル市の裏組織同士の全面戦争になるのではないか――とさえ思った。
　無意識にテーブルの下でＥＮＩＧＭＡ（エニグマ）――戦術オーブメントのうち第５世代のものを指す。通信機能も備えている――を手に取った。
　ラーメンを食べる振りして、声を絞り出す。
「た……たすけ……」

「あはは、なにやってんですか。お箸は、ここを開けて取るんですよ～？」
　ガルシアとツァオが掴んでいる箸箱の蓋を開けたのは、フランだった。
　四本の割り箸を取りだして。
「はい、まず年長者の熊さんから」
「……あ、おう」
　ガルシアは箸箱から手を離し、割り箸を受け取った。
　彼の巨大な手に持たれると、箸が小さく見える。
　次にフランは右隣へ。
「はい、どうぞ」
「フフ……ありがとうございます」
「レイモンドさんも」
「あ、ありがとう……」
　弱々しく震える手で割り箸を受け取った。
　正直、ラーメンを食べられるような精神状態ではなかったが、変に目立つのも恐ろしい。
　レイモンドは息を殺してラーメンに口をつけた。
　フランは気付いていない様子で、楽しげにおしゃべりしている。
「熊さんといえば……うちに熊のぬいぐるみがあるんですよ。お姉ちゃんと色違いでお揃いなんですけど」

「そうなのか」とガルシア。

「かわいらしいですね」とツァオ。

なぜか、ふたりとも付き合いよく彼女の話に耳を傾けていた。

「わたしのが、白色でバンバンなんです！」

「……バンバン？　なんで鉄砲の話になったんだ？」

首をかしげるガルシアに対して、ツァオは苦笑して。

「ぬいぐるみの名前ですね？」

「そうなんです～。お姉ちゃんは恥ずかしいからって名前をつけてないみたいなんですけど」

「ふんっ、そういうことか」

「フフ……鉄砲」

冷笑したツァオに、ガルシアが歯噛みする。

「ぐっ」

反撃の言葉も浮かばなかったらしく、自棄のようにガルシアがラーメンをすすりはじめた。

すごい勢いだ。

フランが目を丸くする。

「おお、すごいですね！　さすが熊さんですね～」

「ふんっ、メシを食べるから力が出る。そして、メシは食べられるときに食べておく……それが生き残るためのコツだ」

「なるほど。なんか、たくさん食べる男の人ってカッコイイですよね～」

「………腹が減ったから食べてるだけだがな。おい親父、替え玉だ」

「へイ、今すぐ」

ガルシアが、ツァオを横目に鼻で笑う。

「ククク……まぁ、そろばんばかり弾いてるヤツには、ネギが似合いだな」

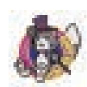
「フッ……店主、激辛十倍を」

「へイ、激辛十倍で」

「むっ⁉　おい親父、こっちは二十倍だ！」

「へ、へイ」

「では、三十倍で――」



辛みが目に沁みるような赤々としたラーメンが出てきた。

口に運んだガルシアが固まる。

「ぬっ⁉」

「むむ……いや、これくらいは……」

辛さについてはツァオのほうが慣れているか。それでも、指先が微かに震えていた。

レイモンドはまだ最初のラーメンが半分も減っていない。

フランもおしゃべりばかりしていた。美味しそうに食べてはいるが、どこまでもマイペースだ。

「もうすこししたら、この辺も記念祭で賑やかになるんでしょうね～。今はエルム湖の水の音ばかりですけど」

今はラーメンをすする音がしているんじゃないかな？　とレイモンドは心の中でツッコミを入れた。

「わたし、お姉ちゃんとパレードを見に行こうと思ってるんですよね～……ふふっ……でも、ロイドさんも誘っちゃおうかな～？　なんて。ちょっと大胆発言ですかね⁉　きゃ～」

レイモンドの背中を、ばしばしと叩いてきた。

「げほっ！　げほっ！」

ツァオが目をすがめる。

「ロイドさん？　それは……特務支援課の？」

「あ、はい！　ご存知なんですか？」

「ええ……少しだけお話したことがありまして。もしかして、浅からぬ仲なのでしょうか？」

「えっ⁉　あははっ、そんなんじゃないですよ～。でも、お姉ちゃんとは、どうなのかな～って思ってるんです。わたしから見ると結構相性が良さそうな感じなんですけど……でも、エリィさんもいるしな～」

「ほほう……なかなか、ロイドさんも隅に置けませんね」

ガルシアが水を片手につぶやく。

「ふんっ、あの小僧か……気の多いところは兄貴に似なかったようだな」

捜査と関係ないところで特務支援課と裏組織との溝が深まった気がするレイモンドだった。

もともと、警察組織とマフィアとでは犬猿の仲だが。

フランがガルシアとツァオに尋ねる。

「みなさんは、記念祭はどうするご予定なんですか？」

「俺は仕事があるんでな。毎年、記念祭はミシュラムだ」

「おおっ、いいですね～ミシュラム！　一番の人気スポットじゃないですか！」

「仕事だから、お遊び気分じゃいられねえのさ。なんせ一年の半分近い稼ぎがあるんでな」

レイモンドは心拍数が上がるのを感じた。

マフィアが記念祭で何やら大きな取引をしているらしい、という噂は聞いたことがあったが……

本当だったのか。

しかも、ミシュラムで。

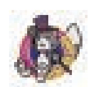
知ったところで捜査二課の自分では、どうしようもないし、どうせ捜査一課の連中は知っていることなのだろうけれど、クロスベルの闇を垣間見た気がしてレイモンドの肌が粟立った。

ガルシアは〝知ったところで警察には何もできまい〟と思っ

て口にしているのだ。
　ツァオも水で喉を冷ましてから。
「私は初めての記念祭なので、今回は観光を楽しもうかと思っていますよ」
「わ～、いいですね～」
「フフ……まぁ、仲間がどうするかは、わかりませんが」
　ガルシアが牙をむいた。
「ふんっ、なにやらネズミがチョロチョロしてやがるようだがな。どうせ何もできやしねえ」
「さて、それはどうでしょうか？」
　レイモンドは緊張を高めた。
（記念祭にルバーチェ商会と黒月（ヘイユエ）の衝突が⁉）
　多数の観光客で賑わうクロスベルで、抗争事件など起きたら、大変だ！
　やはり、警察官として、看過できない。
　レイモンドはカウンターの下でエニグマを握りしめた。
　使命感を持って声を絞り出す。
「……た……たすけ……て」
　精一杯だった。
　見ないで操作したので、ちゃんと連絡できているかわからない。
　そもそも、自分の居場所さえ伝えていないので、どんな意味があるのか。
　その間にもガルシアとツァオは口調こそ穏やかなものの、睨み合っていた。
「新参者が何をしたところで、この街は変わらねえ。どっかの小僧たちと同じだ」
「私は、彼らにも期待していますよ。大きな障害であろうとも打ち破るだけの力がある、と感じています……まぁ、その前に我々が変えてしまうかもしれませんがね」
「ククク……でかい花火でもあげようって腹か？」
「……正直、ここまで来ておいて、何もしないということはありえませんよ。我々は、そこまで優しくも悠長でもない」
（やはり、なにかあるのか⁉）
　レイモンドは恐ろしくなってきた。
　フランが腰を浮かせてはしゃぐ。
「おおっ、花火ですか⁉　あげちゃいますか！　大きいの、どかーんって、やっちゃいますか～。いいですね～」
　わずかに驚いた顔をしたツァオだったが、肩を揺らして笑った。
「フフフ……そうですね。せっかくのお祭りです。せいぜい楽しく盛り上げないと、わざわざ異国から来た意味がないというものです」
　ガルシアがキリングベアの笑みを浮かべていた。

「上等だ。何をしようとも、この街を仕切ってるのは俺たちだってことを思い知らせてやる」
「フフ……」
「ククク……」
「おおっ、いいですね～。お祭りらしく盛り上がってきましたね！」
　フランがグラスを片手に掲げて。
「よし！　乾杯しましょう！　記念祭の前祝いってことで！」
「……いいでしょう。これも、なにかの縁」
「ふんっ……おい親父、一杯くれ」
「ヘイ、わりゃした！」
　レイモンドは消えそうな声で頼む。
「あ、ひとつは水かお茶でお願いします」
　フランは未成年なので、そのほうがいいだろう。
「ヘイ」
　四つのグラスが置かれ、透明な液体が、なみなみと注がれた。ひとつは水だが。
（あれ？　まさか、僕も乾杯するのか……？）
　どうやら、そういう流れだった。
　レイモンドは震える手をグラスに伸ばす。ところが、横からフランが何の考えもなさそうな勢いでグラスを持っていってしまった。水じゃないやつを。
「ちょっ……フランちゃん⁉」
　彼女はグラスを掲げて。
「はい、乾杯～‼」
「ククク……今年も何も変わらんさ。いつも通りだ。乾杯！」
「フフ……さて、どうでしょうね……乾杯」
「ちょっ……フランちゃん、こっちじゃないと……」
　レイモンドが水のグラスを彼女に差し出す。そこに、フランが手にしたグラスをゴッと当ててきた。
「かんぱ～～～い！」
「あっ」
　グラスから飛んだ液体が、ガルシアの袖を濡らしてしまう。
「…………」
　彼が目を細めた。
　レイモンドは、心臓が止まった――と思った。
　喉がからからに渇いて、全身の毛穴という毛穴から汗が噴き出す。
「…………すすすすみません、袖に……あ、その……」
　また背中をバンバンと叩かれる。
「あはは！　なに気にしてるんですか、レイモンドさん！　お祝いの席なんですから、そんな小さなこと言ってちゃらモテましぇんよ～？」
　とうとう、フランは呂律が回らなくなってきた。

そのまま肩を倒して、もたれかかってくる。
やわらかくて、いい匂いが……。
(いや、それどころじゃない!)
この状況を残して、自分だけ夢の国に旅立たれても、とっても困る。
フランを支え、左右を見た。
さっきまで、なんだかんだ言って機嫌よさそうにしていたガルシアとツァオが、今にも殺し合いを始めそうな恐ろしい表情をしている。
(な、な、なんだ⁉)
「チッ……」
「どうやら、お遊びはここまでのようです」
二人が席を立った。
殺気に満ちた声を交わす。
「ルバーチェ商会に手を出すってことは、覚悟できてんだろうな?」
「惜しいかな、貴方がトップではない。それが、そちらの弱点ですよ」
「うちの会長の悪口ならやめとけや。いろいろと恩があるんでな」
「フッ……」
こうなったら、もう走って逃げるか? とレイモンドは考える。
しかし、フランを置いてはいけない。
(どうしたら?)
そのとき、まばゆい光が周囲を照らし出した。



ガチャガチャと金属音をさせて、武装した警備隊が列を成す。
強烈な光は、警備隊の装甲車からのものだ。
さらに、大型の導力銃を携えた警察官まで現れた。
無数の照明を背に、数名が近づいてくる。
レイモンドは呆然と眺めていた。
支えていたフランが――どうやら、少し寝ていたらしい。
目を開けると、まぶしそうにしつつも。
「あっ、お姉ちゃん⁉」
叫んだ。
光のなかを歩いてくる者たちが、駆け寄ってくる。
そのひとりは、警備隊のノエル・シーカー曹長だった。
「フラン!」
「お姉ちゃん⁉ 迎えに来てくれたの? ありがと～」
「なに言ってるの、あなたが何かの事件に巻きこまれたって聞いて……どういうこと⁉」
「事件? わたしたちは、ラーメン食べてただけだけど……なにかあったの?」
「えっ、ラーメン……食べてたの? 一緒に?」
「うん」
「……マフィアと?」
「なんのこと?」
ノエルと一緒に来たのは、特務支援課の面々だった。
ロイドが、ガルシアとツァオと向き合う。
「これは、いったい?」
「ククク……こっちが聞きたいぜ」
「フッ……私たちは屋台で食事していただけですよ、ロイドさん」
「ええっ⁉」
説明を求める視線が、ロイドたちからレイモンドに向けられた。
「ははは……こ、困ったな～」
おそらくエニグマは、うまく操作できていたのだ。
助けを求める声は受付嬢のレベッカに届いた。
それが、どう伝わったのか……?
結果、港湾区に警備隊の装甲車と、重装備の警察官が列をなしていた。
ガルシアが高笑いする。
「ハッハッハッ! 俺の知らないうちに、屋台でラーメンを食べちゃいけねえって法律でもできたのかよ?」
「私は仕事が残っているので失礼しますよ、ロイドさん」
ツァオが丁寧に頭をさげた。
ロイドは笑みを浮かべる。
「お騒がせして、もうしわけありません。トラブルや事件がなかったのなら本当によかったです。これからも、ずっと、そうありたいものです」
「ククク……小僧が、言うじゃねえか」
「フフ……そうですね、平和が一番です。それでは、またいずれ」
ガルシアとツァオは最後に視線を交わすと、結局はなにも言わずに、それぞれの事務所へと帰っていった。
フランがノエルにへばりついている。
ロイドたちは警備隊と警察に事情を説明しにいった。
「…………」
呆然と立っていたレイモンドのエニグマが、けたたましい音をたてる。
「あ、はい!」
『おい、レイモンド、なにが起きた⁉』
ドノバン警部だ。

かなり怒っている声だった。警察官の誤報で警備隊まで出動したとあっては当然か。
「えっと……屋台で……ちょっとした誤解がありまして～」
『なんだと～!?』
「す、すみません！」
『ばかもん！　明日までに詳細な報告書を用意しろ！』
「あわわ、明日まで～!?」
『レイモンド！』
「は、はい！」
『ケガは……ないんだな？』
「あ……はい。あの……大丈夫です……僕もフランちゃんも」
『うむ。それならいい』
「警部……」
　エニグマでの通信を終える。
　フランはノエルに預けた。ロイドたちが警備隊や警察官への説明をしてくれて、彼らは粛々と引き上げる。
　やがて、何事もなかったかのようにレイモンドだけが残された。
　今頃になって、屋台のラーメンの匂いが鼻に絡む。
　食べたけど、ぜんぜん味を覚えてない。
「なんか、もったいなかったな～」
　振り向くと店主が立っていた。
「ああ、騒がしくしちゃって申し訳なかったね」
「いやいや、それより、お客さん」
「ん？」
「ラーメン三杯と、激辛ラーメン二杯と、ネギラーメン一杯、全部でこんだけなんで」
「……は？」
「まいどありゃっした！」
「ぼ……僕が……？」
「こんだけなんで！　ありゃっした！」
「あ、はい」
　差し出された手に、レイモンドは財布からミラを支払う。
　すっかり懐が寂しくなった。
　あいつら、支払わずに帰りやがった！
　警察官になって、これほど悪を憎んだことはない。
　ぐっと拳を握りしめる。
　港湾区から見える夜のエルム湖へと叫ぶ。
「おのれ、マフィアども！　ぜったいに許さないぞー!!」

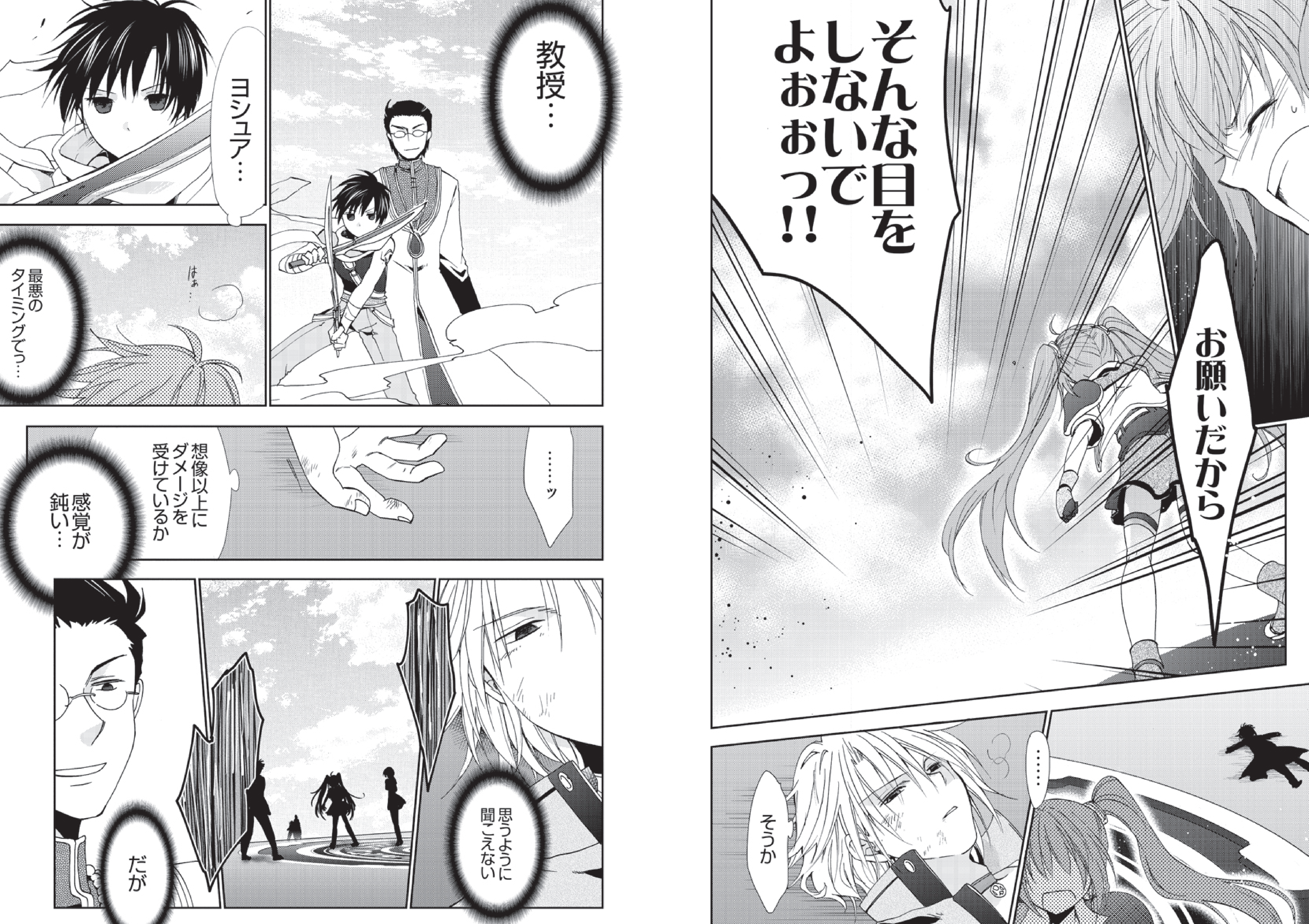
第９話　『フランとマフィアとラーメン屋台』　了



──痺れる
指先が
頭の奥が
何が起きた
この手はさっきまで──…
ヨシュア
空の軌跡 外伝
レーヴェ物語
第十八話
脚本 田沢大典
作画 楽時たらひ



FB ファルコムBOOKS
英雄伝説 零の軌跡
四つの運命
著者：田沢大典 イラスト：松竜
特務支援課はここから始まった!!
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
日本ファルコムの大ヒットRPG『英雄伝説 零の軌跡』から、ロイドたち特務支援課の過去エピソードを描いたオフィシャルノベライズ。ゲーム本編では語られなかった名シーンの裏側やキャラクターそれぞれの心情が今、明らかになる！
原作：日本ファルコム
（『英雄伝説 空の軌跡』）
価格：1,155円(税込)
ISBN:978-489610-215-4
全国書店にて大好評発売中!!
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら
www.field-y.co.jp



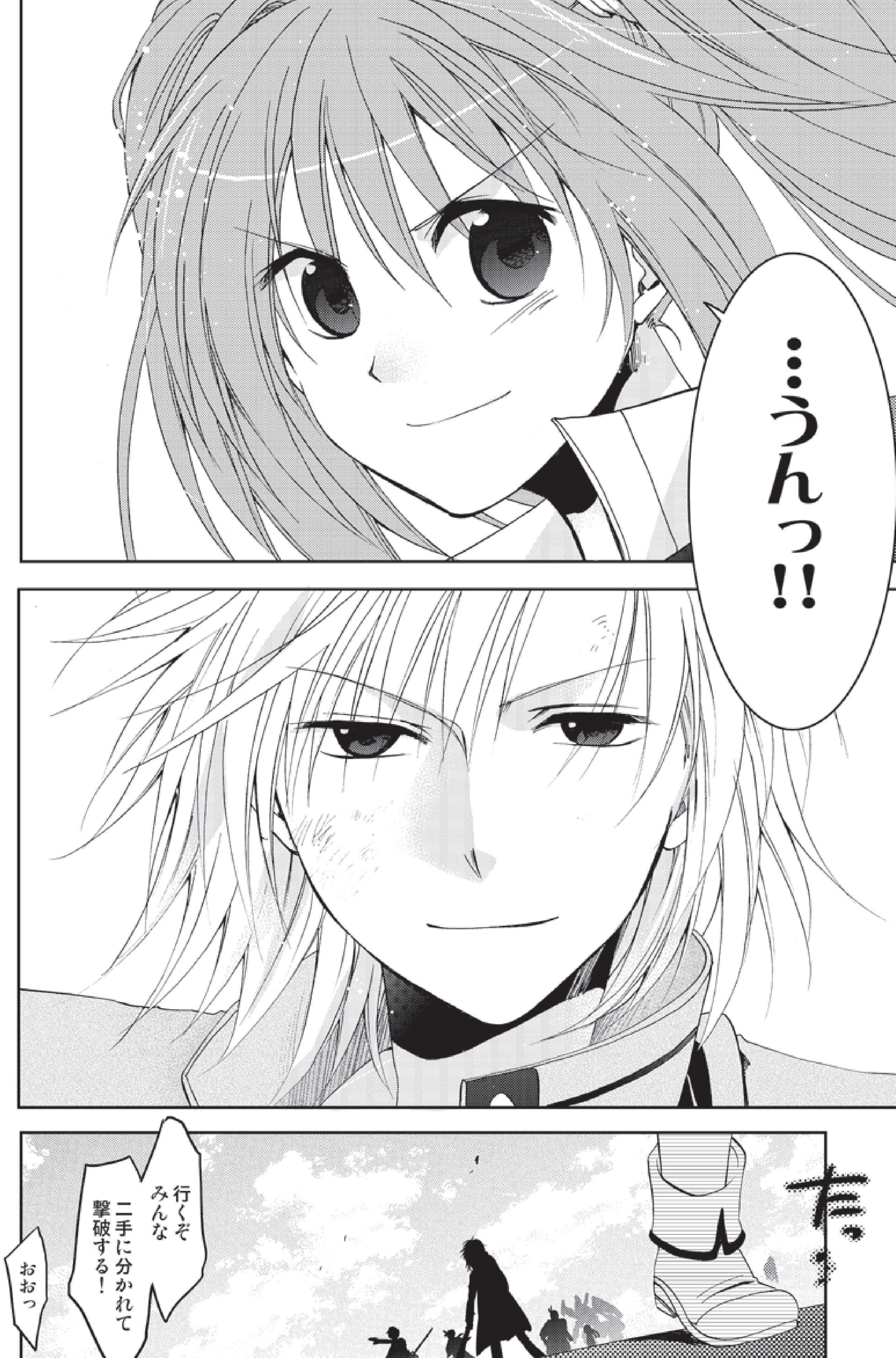
そんな目をしないでよおおおっ!!
お願いだから
……
そうか
教授…
ヨシュア…
はぁ…
最悪のタイミングでっ…
……ッ
想像以上にダメージを受けているか
感覚が鈍い…
思うように聞こえない
だが

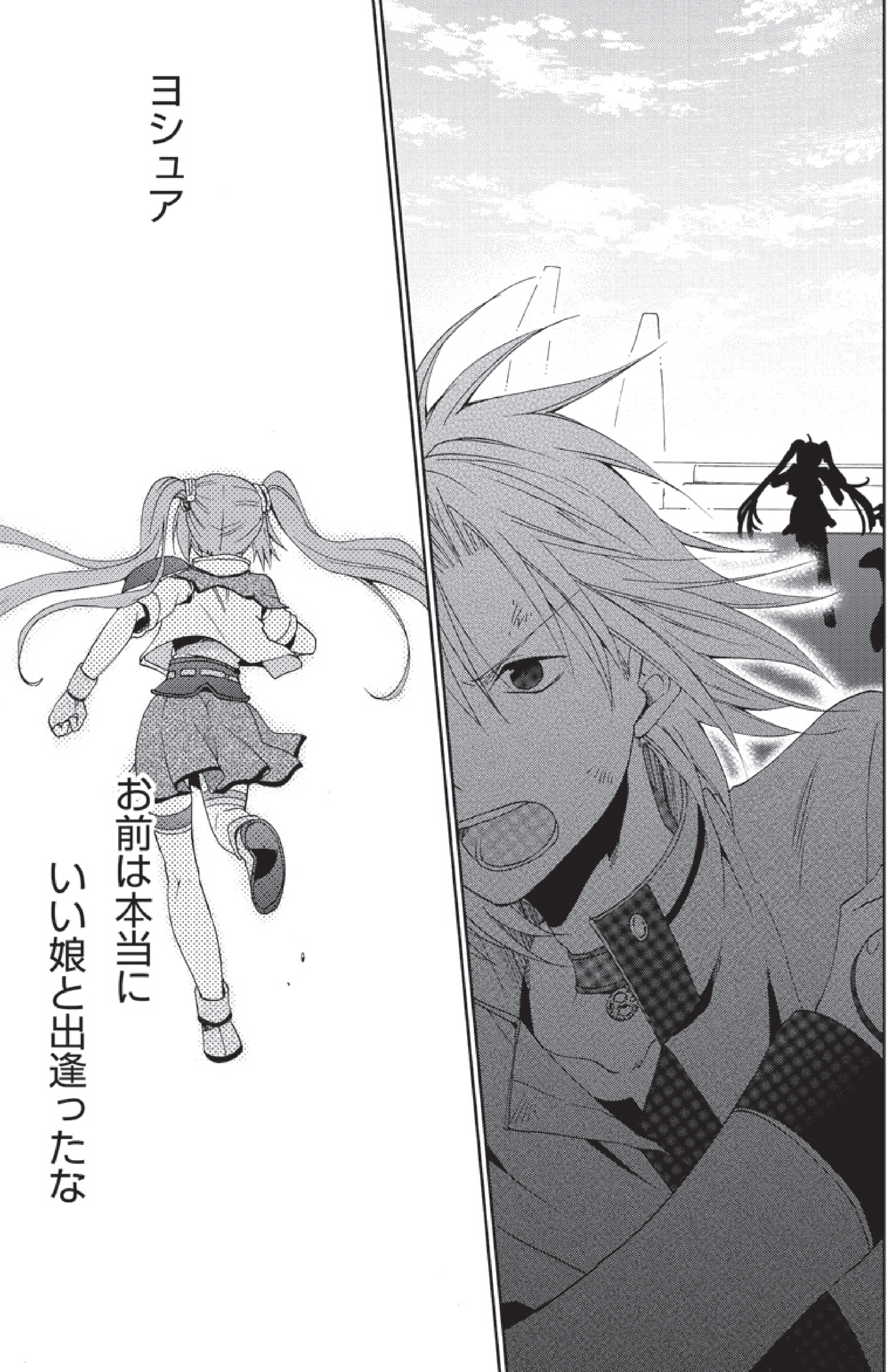

あの娘が抗っているのが
ヨシュアの為だと
いうことは
わかる
あの娘なら
ヤベェな…
どうすりゃあ《根源区間》って所に…
……奥にある大型エレベーターを使え…


！
よかったレーヴェッ…
あのエレベーターから《環》が眠る《根源区間》に降りることができるはずだ…
急げ
もう…時間がない
あの娘なら
ヨシュアを
ッ!!!
……
わかった!



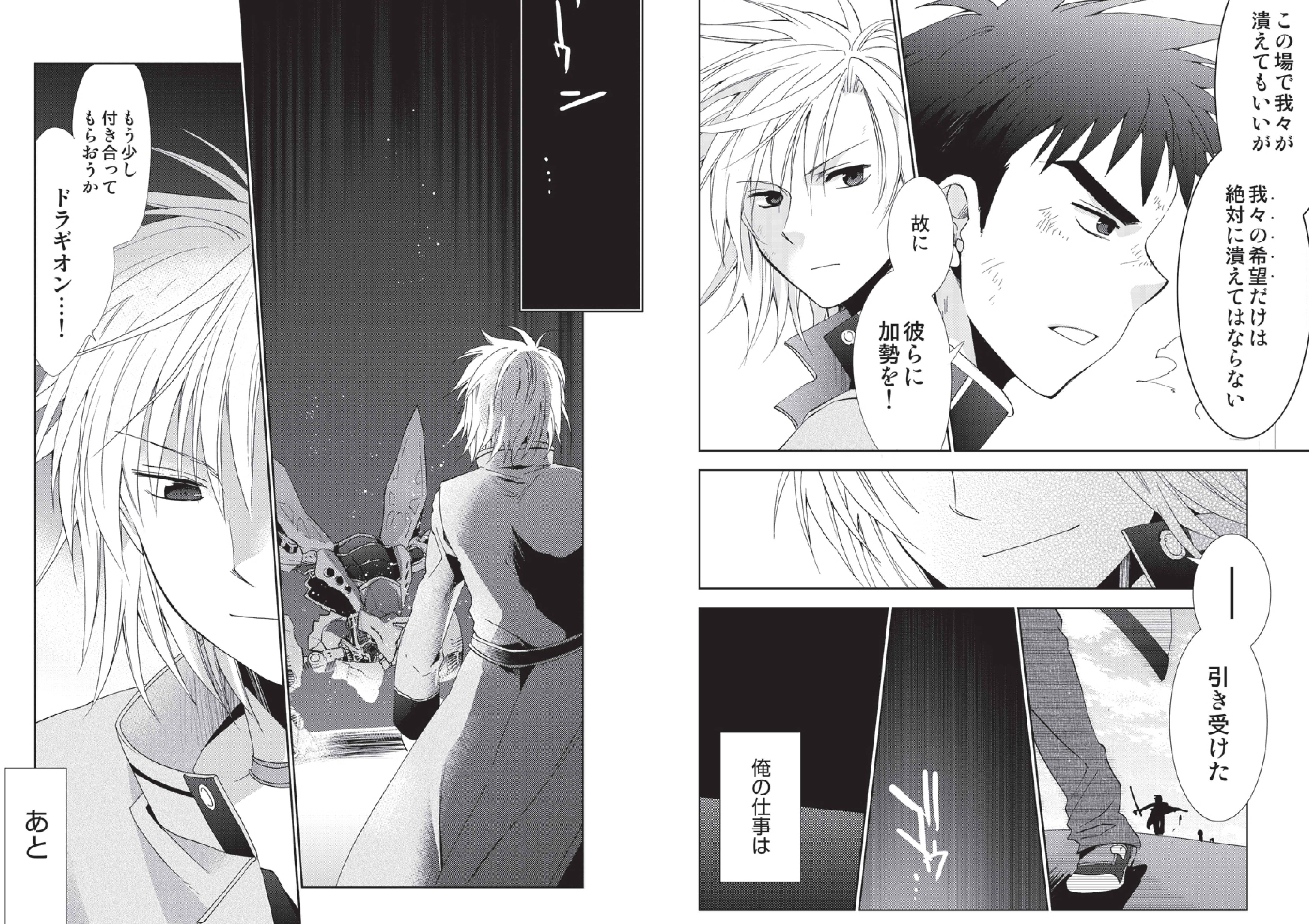
ア…アルセイユを撃墜した…
ッ…でも何とかして切り抜けないとッ…
ここは我々が引き受けよう！
ユリアさん
ミュラーさん
それに…みんな…!!
行け…エステル・ブライト
！
その輝きをもって…ヨシュアを取り戻すがいい…!!


…うんっ!!
行くぞ
みんな
二手に分かれて
撃破する！
おおっ


ヨシュア
お前は本当に
いい娘と出逢ったな



あの娘はきっと
お前の闇を
照らしてくれるだろう
太陽のように
青空のように
どこにいても
お前を見つけて
包んでくれるだろう
あの娘がお前の
傍にいるなら
俺の仕事も
終わる
あとひとつを
残して
キリがないな…
どんどん
増えて
いく…っ！
！
死にたく
なければね！
ひぃ
そろそろ
休みを入れたい
ところだねぇ
——剣帝
甘ったれたこと
言ってん
じゃないわよ
貴様は先に
彼らを追ってくれ
戦況は
悪くなる
一方だ
！


この場で我々が潰えてもいいが
我々の希望だけは絶対に潰えてはならない
故に
彼らに加勢を！
――
引き受けた
俺の仕事は
ゥン
……
もう少し付き合ってもらおうか
ドラギオン…！
あと


ひとつ
全然攻撃が
通用しないっ……!
クク…七至宝の中でも《輝く環(オーリオール)》は空間を司る存在
導力魔法とは比べ物にならない圧倒的な絶対障壁を展開できる
もはや私と君達では——存在の次元が違いすぎるのだよ!!
うぁああッ!!
くッ……!
あうッ…
ヨシュア
やはりお前は再び実験人形として使ってやる…
じっくり調整しながら…希望を与え…その芽を摘み取ってやろう…
……!!


もはや悪趣味というより
病気といった方がよさそうだな
!!
…!
レーヴェ…!
…ようこそ
と言いたいところだね
レーヴェ
何をしに来た？
いかにドラギオンといえどもこの障壁を破ることは不可能だが
…だろうな
「ハーメルの悲劇」
貴様はどの程度関与していた？
——…
時にワイスマン
!!
…レーヴェ
何を…？
おぉ…人聞きの悪いことを
何故そんなことを聞くのかね
まさかっ…
それは貴様が“蛇”だからだ
弱みを持つ人の前に現れて破壊をもたらす計画を囁く
そして手を汚すことなく自らの目的を達成してしまう


それが貴様のやり口だろう
ヨシュア…!
大方…予想通りということか
フフ…
意外と冷静だなレーヴェ
あぁ
俺にはもう煮えくる情熱も心もない
ただ…
真実を確かめておきたかったのと

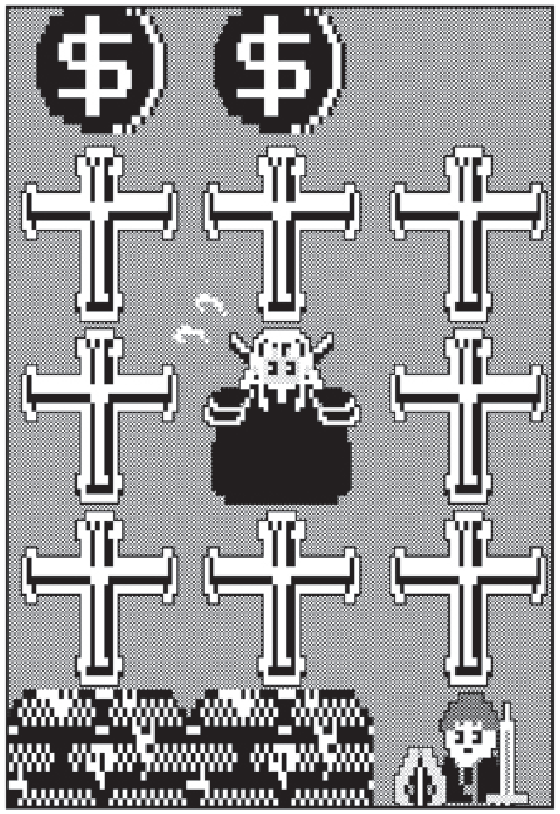

な…
馬鹿な
障壁に歪みがッ…!?
なぜ
先ほどの失態…《剣帝》としての屈辱の極み
それだけは返させてもらおう
!!?
!!
そうか
それは


盟主から授かった魔剣
ケルン＝バイター
これならば至宝の力も
斬り裂いてくれよう…!!
クッ…
ええい
離れろ
離れろ
離れろ
離れろ
痴れ者があぁぁぁぁぁ!!!


もう終わるぞ
ヨシュア
この男によって
歪められた運命も
もう
終わる
ギ…キ
もう


FB ファルコムBOOKS
空の軌跡外伝
レーヴェ物語
作画：楽時たらひ　脚本：田沢大典
『空の軌跡』が始まる——
もうひとつの
原作：日本ファルコム
（『英雄伝説 空の軌跡』）
価格：893円(税込)
ISBN:978-489610-224-6
「英雄伝説 空の軌跡」の人気キャラクター・《剣帝》レオンハルトの過去を描くアウターストーリーのコミカライズ。彼はいかにして《身喰らう蛇》に与みし、数奇な運命を辿ったのか。レオンハルトの目線から見たもうひとつの「空の軌跡」の物語が始まる！
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
全国書店にて大好評発売中!!
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら
www.field-y.co.jp


あとは
自分の手で
切り拓け

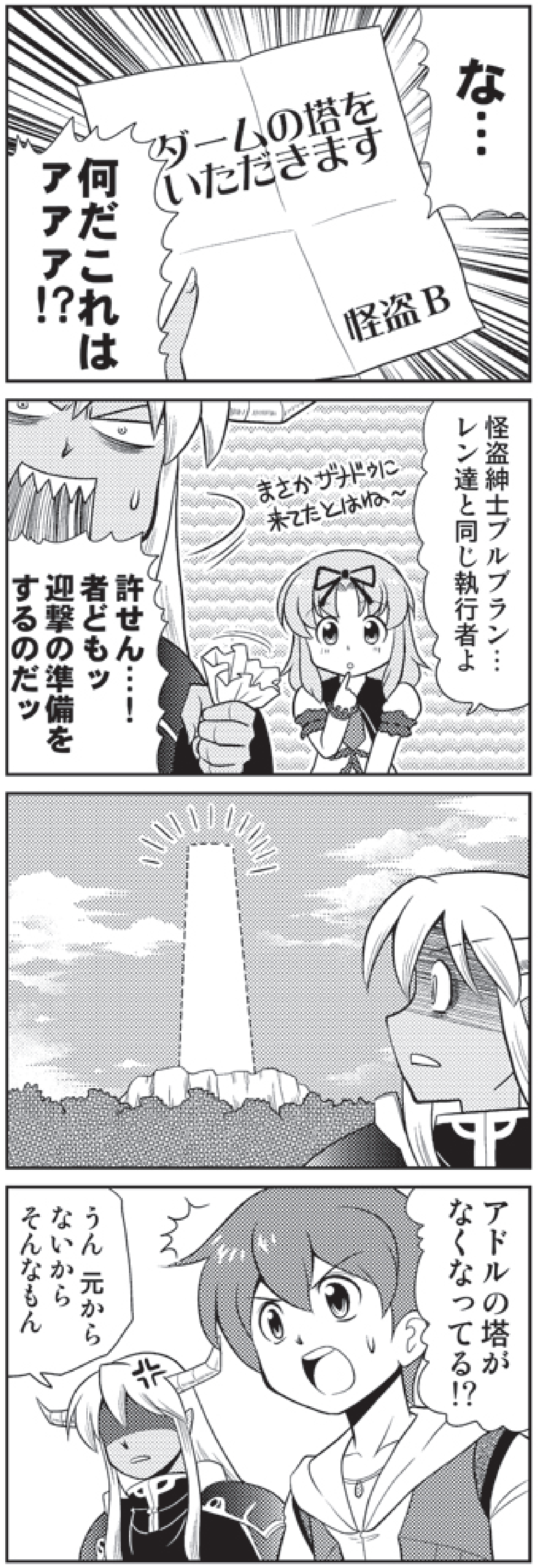


みんな集まれ！

ファルコム学園

新久保だいすけ

怪盗Bの挑戦



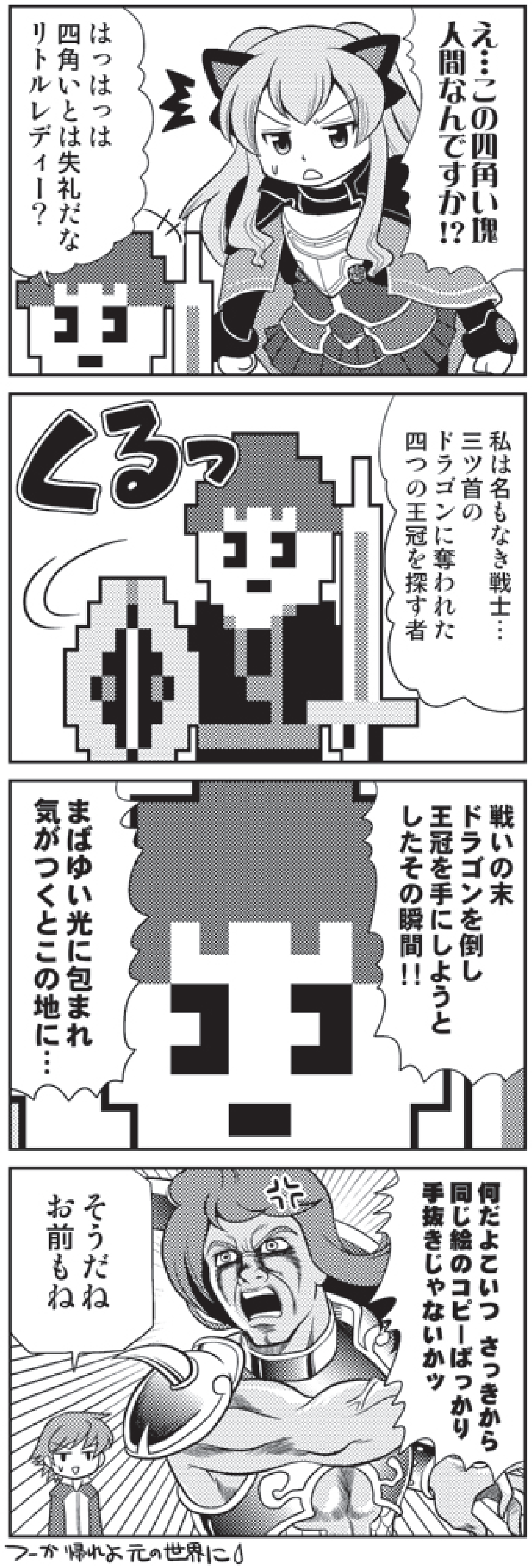
被害届



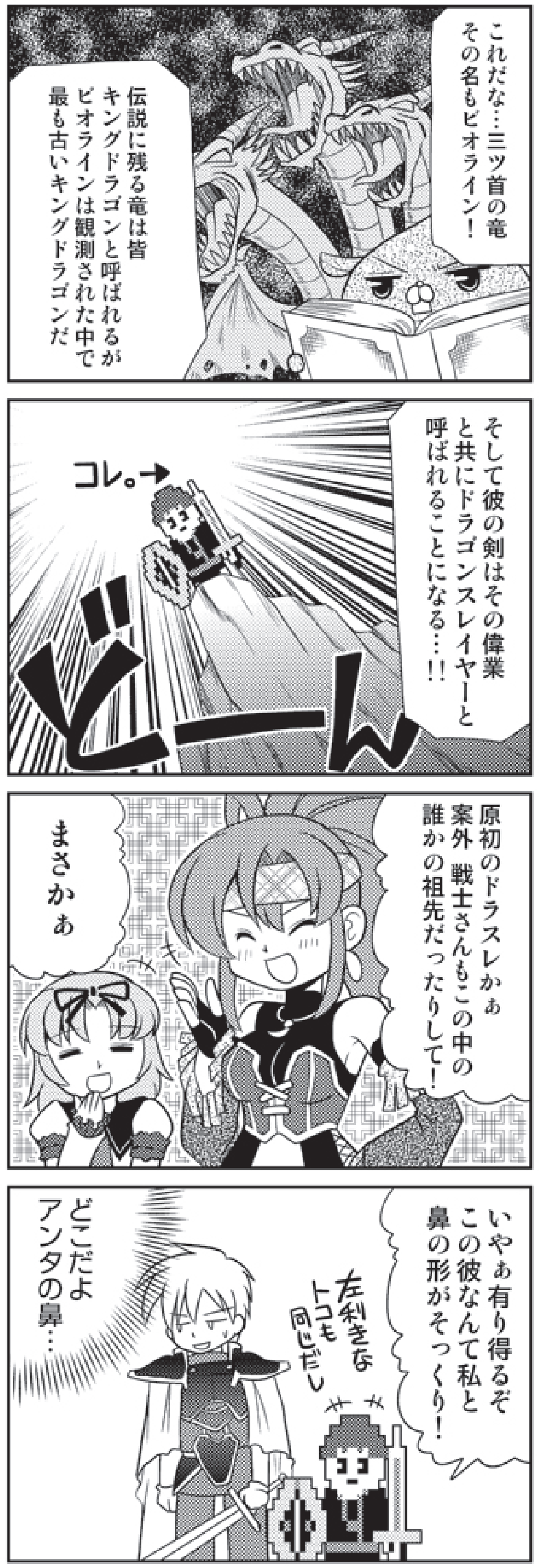
ザナドゥ連続盗難事件



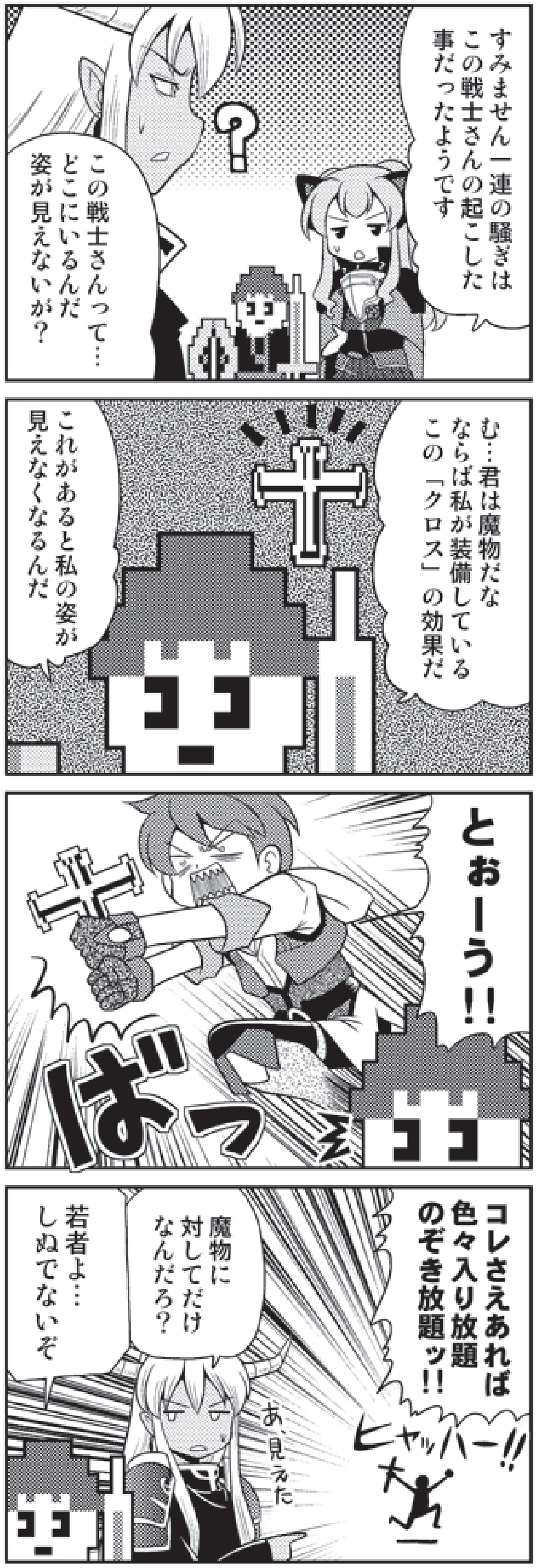
合理化という名の手抜き



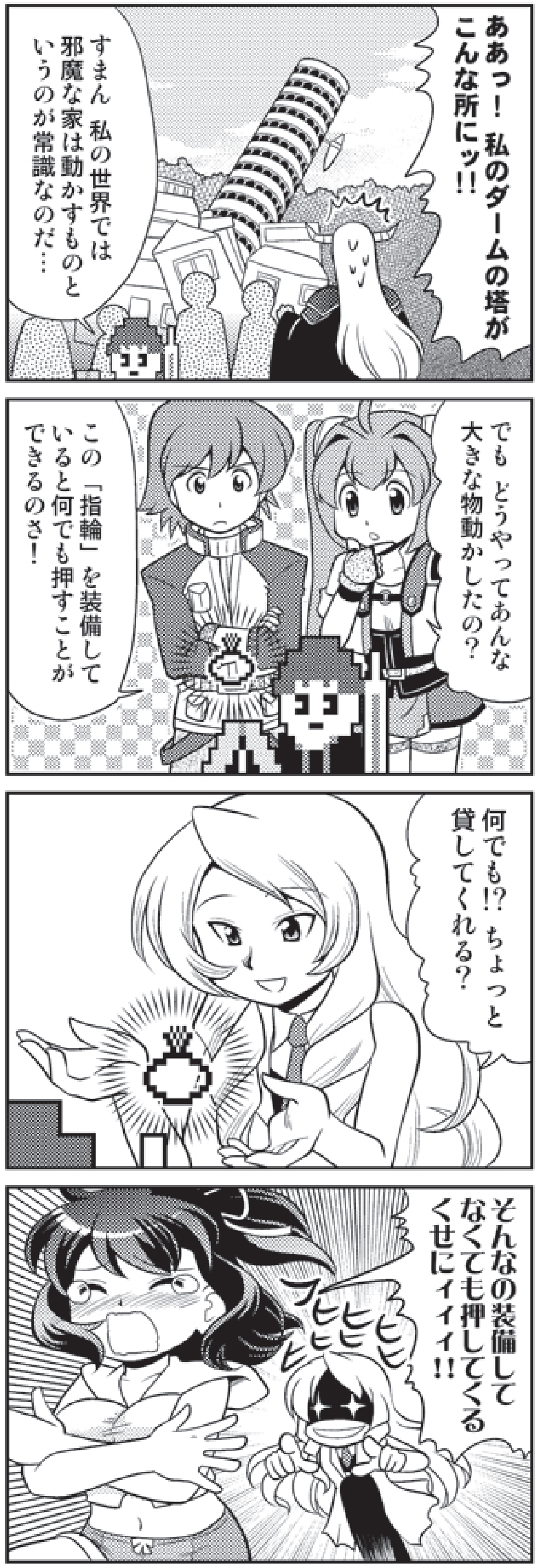
ドラゴンスレイヤーⅠ



見えない十字架



魔法の指輪



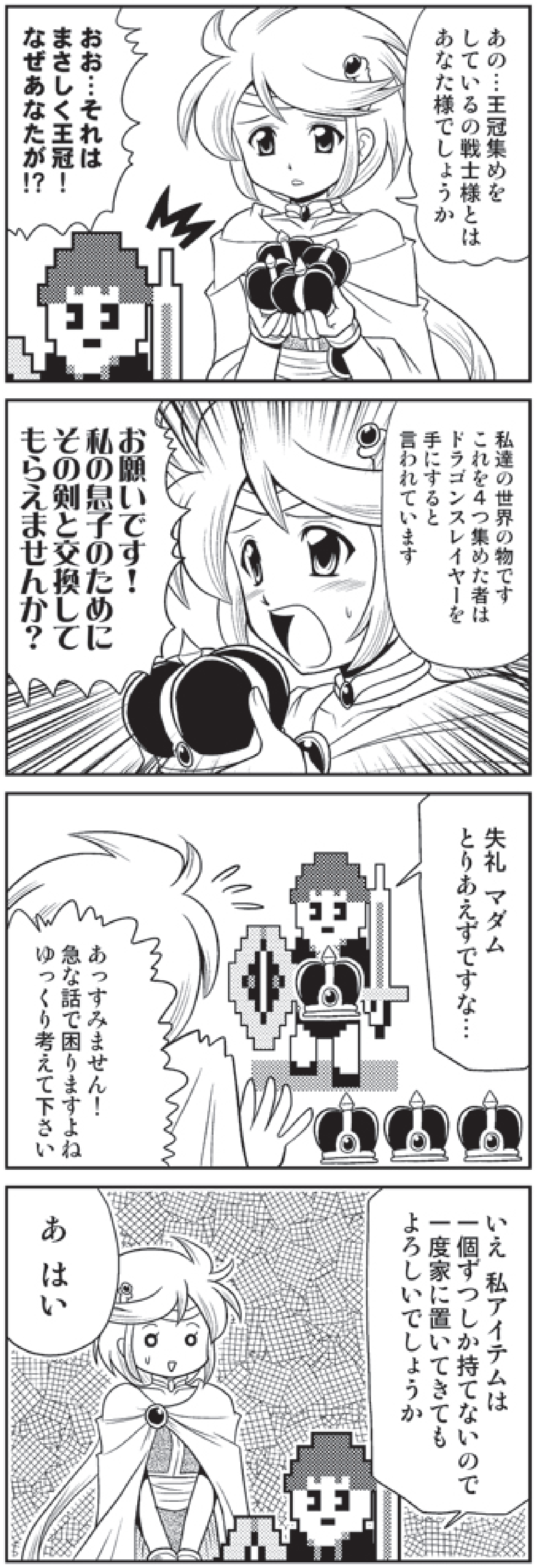
ちからじまん



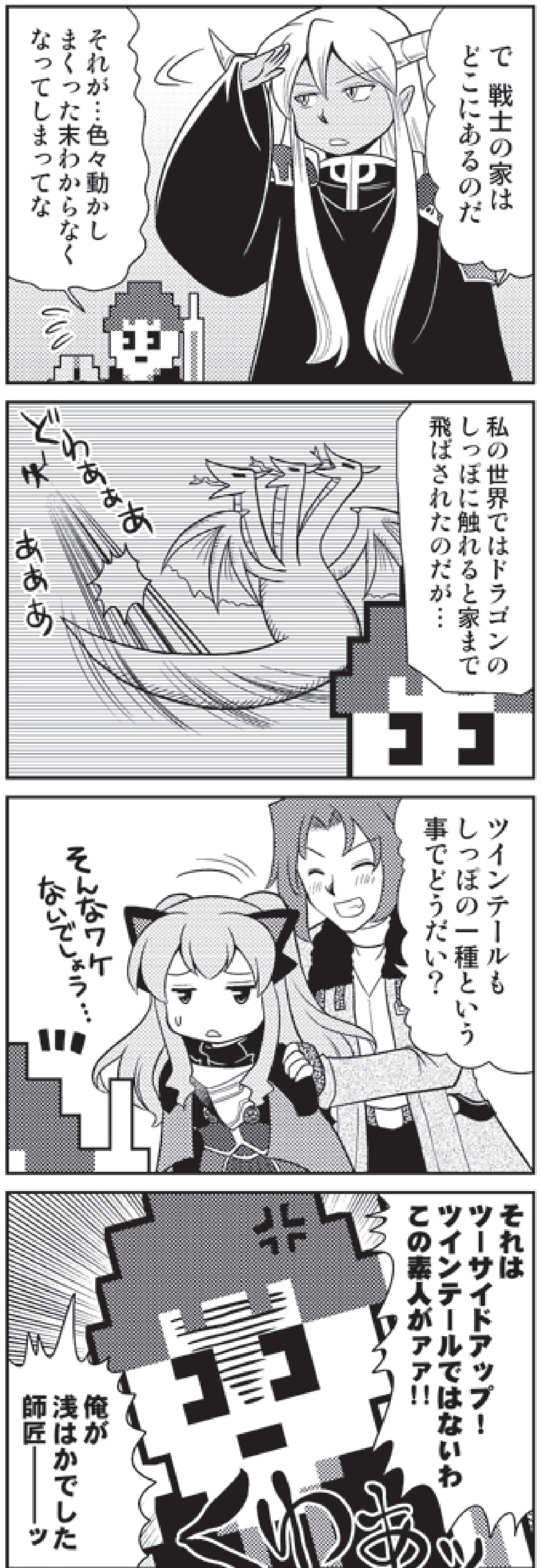
進化する冒険



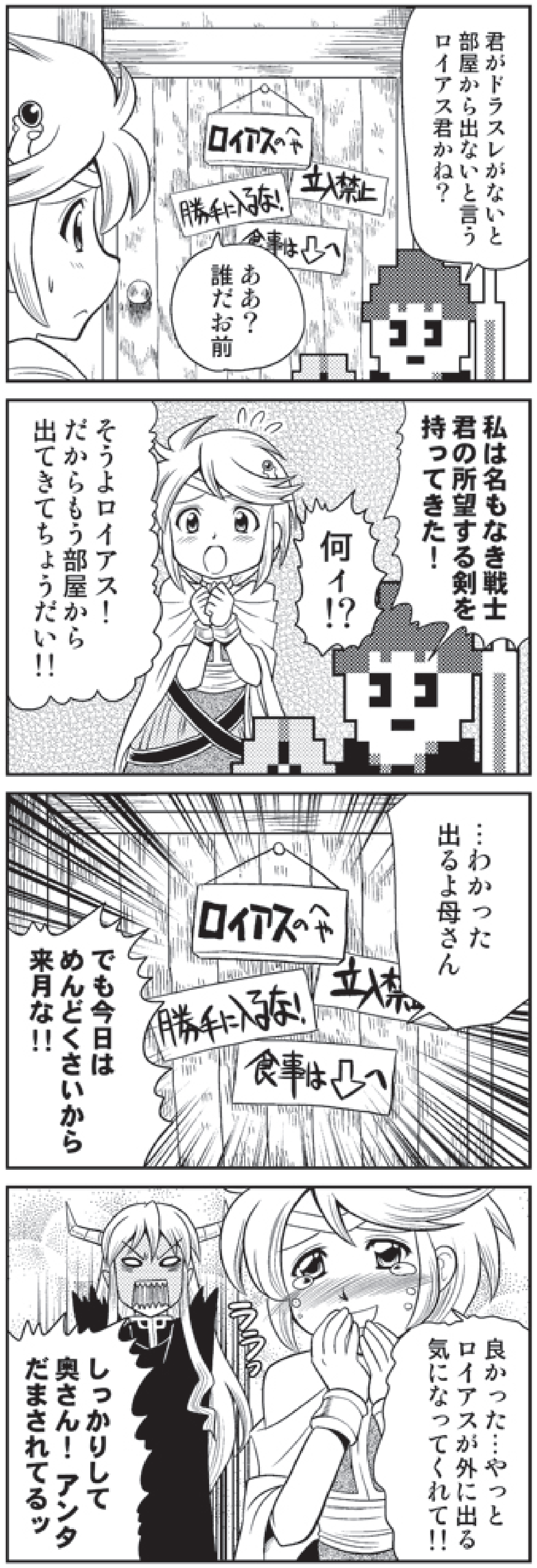
戦士の弱点



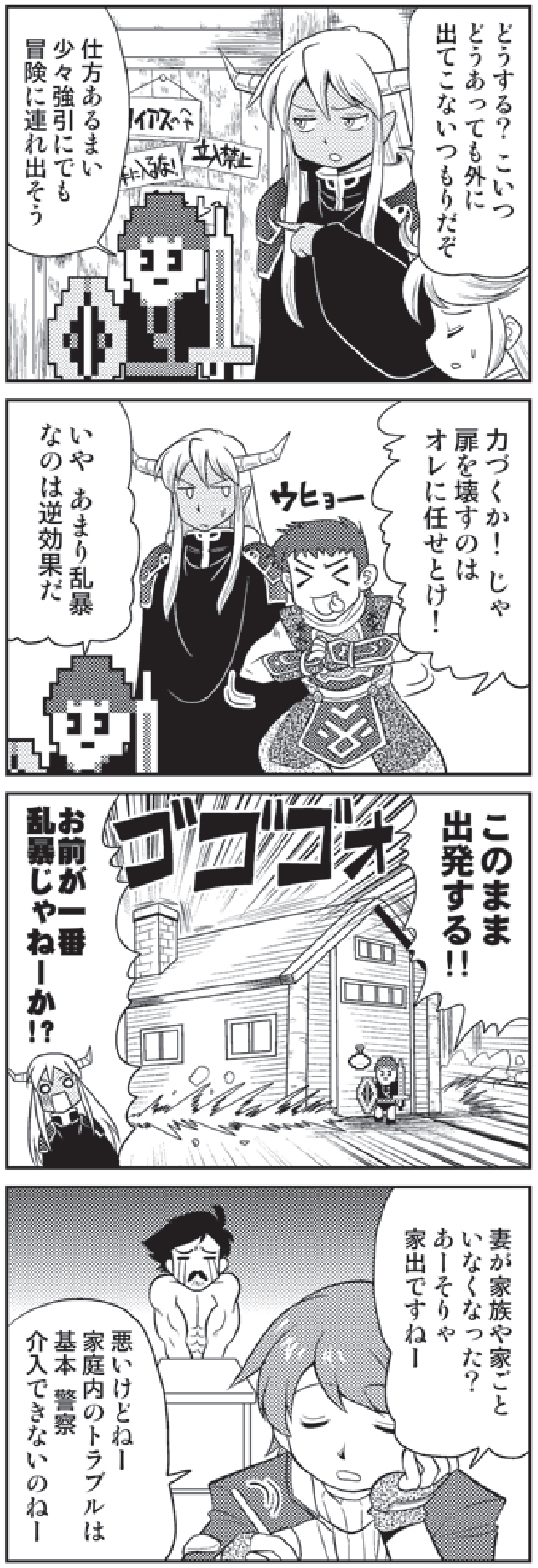
しっぽ



ロイアスが外に出る日



二人で冒険

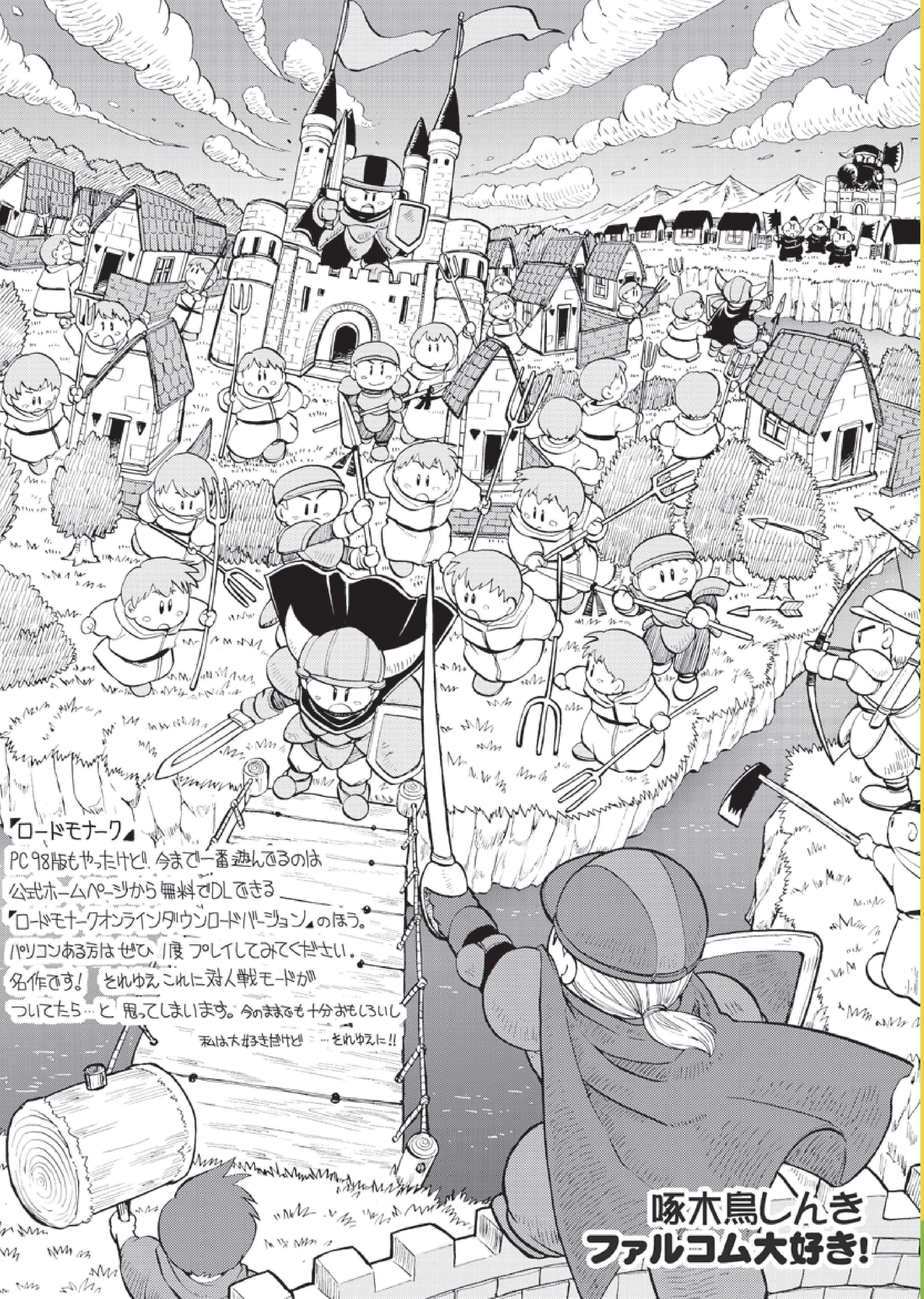


放置型ＲＰＧ



認めたくない現実




『ロードモナーク』
PC 98版もやったけど!!、今まで一番遊んでるのは
公式ホームページから無料でDLできる
『ロードモナークオンラインダウンロードバージョン』のほう。
パソコンある方はぜひ1度プレイしてみてください。
名作です！ それゆえこれに対人戦モードが
ついてたら…と思ってしまいます。今のままでも十分おもしろいし
私は大好きだけど!! …それゆえに!!
啄木鳥しんき
ファルコム大好き！

英雄伝説 空の軌跡
～リベール王国スナップショット～

第6回『瞳にハイライト！』

著：はせがわみやび

6.

夕映えが白い外壁を赤く染めている。

ジェニス王立学園の女子寮を見上げながら、ドロシーはため息をついた。

――どうしてこうなったんでしょう。

玄関を抜け、一階の端の部屋へと辿りつく。扉を開けると、アリスが期待に目を輝かせて待っていた。

「ど、どうでした⁉」

「許可していただきました。部屋が空いているなら構わない、と。宿直室にでも泊めてもらえれば、というつもりだったのですが」

「そんなっ。ドロシーさんは、学園のために写真を届けに来てくれたんでしょう」

「いえいえ。個人的なお願いでしたし」

リベール通信社とも学園とも関係なく、取材写真を撮る傍ら、食堂のデボラと私的に交わした約束なのだ。

「そうなんですか？　でも、よかった！」

言いながら、ベッドの上で座ったままアリスがぽんぽんと跳ねる。

純粋に喜んでいる彼女の顔を見て、まあいいかとドロシーは思い直した。好奇心が疼いているのも確かだ。

「それで、先ほどのお話なのですけれど……」

ドロシーの言葉にアリスの顔から笑みが消えた。頬を引きつらせる。アリスの怖がりは本物のようだ。誰もいないのに左右を見回してから話し始める。

「ええと……。一週間ほど前からなんですけど……。真夜中頃です。家具がガタガタと鳴ったり、足音みたいなのが聞こえたり……」

「それは、他の部屋でも？」

「物音を聞いたっていう子はけっこういます！」

「それで……幽霊だと」

「パープルが、ポルターガイストじゃないかって言い出して」

ポルターガイスト――騒霊現象というのは、心霊現象のひとつで、誰もいないのに物が動いたり、音が聞こえたりすることだ。幽霊の仕業だと言われてたりする。

「パープルってば、最近、自分がホラー小説に凝ってるものだからってもう！　きっと風の音とかに決まってるんですよ！」

「本当に？」

ドロシーの問いに、うっ、とアリスは言葉に詰まった。

泣きそうな顔になったアリスを見て、ドロシーは頭を掻く。しまった、これは言いすぎだ、と反省する。怖がらせるつもりはなかったのだが……。ドロシーとしては幽霊がいるならば、ぜひ見てみたい、できれば写真に収めたいと思っているわけで――。

ひとまず話題を変える。

「パープルさんは作家志望なんでしたっけ？」

「そうみたいです。あたしたち三人って、ばらばらなんですよね」

それは前に彼女たちの写真を撮ったときにも聞いた気がする。

アリス、パープル、モニカの三人組は、それぞれ異なる方向に個性的な生徒たちだった。

ナイアル先輩は、お洒落系、文系、体育系と呼んでいたっけ。

可愛い物好きらしいアリスがお洒落系というわけだ。そういえば今も学園祭で着ていたというドレスのような服を着ている。まるで衣装みたいだと思ったが、本当に衣装だったわけだ。

先輩が文系少女だと指摘したパープルが、先ほど原稿を投稿しに街へと向かった少女で。

部活で合宿中だと言った女の子がモニカだ。

「パープルって、執筆に入ると、周りが見えなくなるんですよ」

「あー」

身に覚えがありすぎる。ドロシーも、おまえはカメラを構えると周りが見えなくなる、とナイアルから始終言われているのだ。急に親近感を覚えてしまった。

「街にあのまま行っちゃったけど、履いてた靴下の柄が昨日

とおんなじだってこと気づいてるのかしら」
「ははは……」
　同じ柄の靴下を連続して履くことに抵抗があるらしい。
「こ、細かいですねー」
「あったりまえじゃないですかー！」
「だって、この学園って制服ですよね……」
「だからこそ、小物に拘るんです！」
　しまった。なにかボタンを押してしまったらしい。
　そこから十五分ほど、みなと同じ制服を着つつ、どうやって差別化してお洒落するかについて延々とまくしたてられ、そのことに気づいてくれないルームメイトへの繰り言がさらに十五分続き、気づいたときにはもう夕食の時間になっていた。
　食堂で夕食を済ませて寮に戻ってきたときには、すっかり夜だった。

7.

　真っ黒な闇の帳が窓の外に降りている。
　ベッドに腰掛け、ドロシーはアリスと向かい合って、寮の話などを聞かせてもらっていた。寮生活の経験がないドロシーには興味深いことばかり。
「面白いです～。あと、さっきから、パープルさんとモニカさんのお話ばかりですね」
　何気なく口にしていた。
「えっ？　そ、そうかなぁ」
「はい。『パープルったら』とか『モニカはね』とか」
「それはその……同室だし」
「それもあるのでしょうけれど」ドロシーは微笑んだ。「大好きなんですねー、おふたりのことが」
　真っ赤になった。
　そのときだ。
　ガタッ、と物音が聞こえた。
　アリスの顔がはっとなる。視線を追ってドロシーは顔を巡らせた。部屋の隅にある衣装箪笥に目が向く。
　そちらから聞こえたっぽい。
　息を殺してじっと見つめていたけれど、物音は一度きりで収まってしまった。
「ド、ドロシーさん……」
「はい」
「今の、聞こえました？」
「……一応」
　顔をそむけたままアリスが答える。意地でも見ないぞと言わんばかり。

　まさか本当にポルターガイスト？　でもまだ真夜中にはほど遠い。幽霊が出るには、早すぎないか？
　けれど、一度疑ってしまうと、室内導力灯（ルームライト）の影に何かが潜んでいる気がしてしまう。
　思い切って立ち上がる。四人部屋の隅に置かれた箪笥のほうへと歩き出そうとして気づいた。
　——えっ？
　ドロシーの巡らせた思考を断ち切るように、ノックの音が響いた。
「入るよ」
　声とともに体操着に上着を羽織っただけの少女が入ってくる。モニカだ。
「風呂の時間だよ、おふたりさん！」
　言って、自分のものらしきベッドの上にどかっと胡坐を掻く。そういえば、お風呂は入りにくるとか言ってたっけ。
「ちょっとモニカってば。お行儀が悪いよ。ドロシーさんが呆れてるじゃないの」
「いえそんな……」
　ドロシーは呆れてはいない。驚いただけだ。
「いいじゃんか、別に。あたしたちだけなんだし」
「あたしたちが見てるでしょ！」
「アリスに見られても別に。減るもんじゃないからいいと思うけど」
「あたしが恥ずかしいの！　もう！」
　まあまあとドロシーがなだめる。
「それより、わたしも、お風呂をいただいてしまって良いんでしょうか？」
　言ったら、アリスが目を剥いた。
　まさか入らないつもりなのかと尋ねてくるので、一日くらいは我慢すると返したら、すごい勢いで腕を掴まれた。
「すぐに行きましょう、ドロシーさん！　お姉さんが汚いままなんてあたし我慢できない！」
　アリスの言葉にモニカががりがりと頭を掻きながら言う。
「女子が汚い恰好で存在するのが女子寮ってもんじゃないのか？」
「そんな伝統はあたしの代で駆逐してやるわ！」
「はいはい」
「モニカにも言ってるの！　さっさと、その汗まみれの服をどうにかしなさいよ！」
　言われて、モニカが自分の身体に視線を落とす。そうかなー、そんなに汚いかなー、と首を捻っている。
「あの……でしたら、みなで一緒に行くというのは？　あっ、入れるかどうかわかりませんけど」
「それは大丈夫です。四人いっぺんに部屋ごとに入れるよう

になってるから」

「あ、なるほど」

寮は最大が四人部屋だと言っていたっけ。

「ほら、モニカも行こうよ」

「あたしは後から行くよ。先に行ってて」

そう言って、ごろりとベッドに横になってしまう。アリスがまた目を吊り上げた。

視線から逃れるようにモニカが背中を向けた。

「えっとその……。では、先にいただいてしまいましょう」

「でも、ドロシーさん……」

「ほらほら。案内していただけますか？」

アリスの背中を押す。

部屋を出るときに、ちらりとドロシーは衣装箪笥に視線を走らせた。

それから寮の長い廊下を歩いて浴場へ。

歩いている途中ですれちがったメガネの生徒が、わたしも一緒にと合流した。この子は確か、とドロシーは記憶を浚う。生徒会長のはずだ。名前はジル。

「あんたたち三人部屋でしょ。じゃ、いいよね！」とにっこり。

同室だという生徒が不在らしく、ひとりきりで入る予定だったとのこと。

男子寮と女子寮にそれぞれ存在するという浴場は、四人が入っても余るほどの大きなもので、まるで温泉に来たかのようだった。

「温泉いいですねー。行きたいなぁ」

一瞬で脱いで湯船に浸かった生徒会長が、はぁと息を吐きだしながら言った。メガネが曇った。お風呂に入るときまでかけてるらしい。

「会長、おじさんみたいですよー」

「むっ。アリスさんってば、あなた、若き乙女に対してなんと失礼な！……と、ところで聞きそびれてたんだけど、そちらの胸の大きいお客様って、前に学園の『白い影』事件のときに訪れた……」

「はい。リベール通信のドロシーです。お、大きくはないですよぅ」

じっと視線を注がれて、ドロシーは湯船に身体を沈めた。

「お姉さんって着やせするんですね！」

「ア、アリスさんまで」

「うう……。うらやましい」

「あるところにはあるってものなのね……」

うらやましげな視線を投げられ、なぜかツァイスの温泉に若い遊撃士の少女と入ったときのことを思い出してしまった。

「お、おふたりはこれからじゃないですかぁ！」

「どうしたらそんなになるんですか」

アリスに真面目な顔で聞かれてしまったので、真面目に考えた。

「そうですねぇ。湯上りにフルーツ牛乳を飲む、とか」

この話はあまり続けたくないので、ドロシーは話題を変えることにした。

「あの……ところでですね。お部屋のふたつの衣装箪笥って、アリスさんたち三人で使っているんですよね？」

アリスが頷いた。

「奥のやつがモニカとパープルので、手前があたしのです」

予想通りの答えが返ってきた。

8.

「アリスさんはひとりで一個使ってるんですねー」

「モニカとパープルがそれでいいって。あのふたり、自分たちはそんなに服を持ってないからって」

なるほど、とドロシーは頷く。

ふたりともこう言ってはなんだけれど、確かに服に気をつかうタイプには見えなかった。つまり、あの奥の箪笥は――物音が聞こえたほうだ――モニカとパープルの共用箪笥だったわけだ。

そして、先ほどアリスは言っていた。

執筆に入ると、パープルは周りが目に入らなくなる、と。

「そうそう。そのモニカさんなんだけど、近頃、どう？」

何気ない口調で切り出したのはジルだ。

「モニカが何か？」

「んー。いや別に何もなければいいの。ただ……彼女、最近、ちょっと部活をサボりがちらしいのよね。そのへんを、アーチェリー部の部長に言われてさー」

「えー!? だってあの子、毎日部活に出てますよ。今日だって合宿にちゃんと参加してたし」

「そ？ それならいいんだ」

そう言って、生徒会長は気にしないでと話を切り上げた。

――ひょっとして……。

ジルはこの件を切り出すために、お風呂に割り込んできたんじゃないかな、とドロシーは気づいた。たまたますれちがった風を装っていたけれど。

メガネを曇らせたジルの表情は読めない。

けれど、たぶん間違いない。どうやらジェニス王立学園の生徒会長は気配りの利く、やり手のようだとドロシーは思った。

そのあとは他愛無い会話が続いた。女三人寄ればというが、話はあっちにいったり、こっちにいったりを繰り返し、いい

加減に出なさいと後続の生徒に促されてようやく風呂をあがった。

いいお風呂だった。湯上りにフルーツ牛乳がないのが惜しい。

モニカは浴場に姿を見せず、部屋に帰ってもいなかった。合宿所に戻ったのだろうとアリスが言う。お風呂に入らない気かしらと憤慨していた。

ドロシーは、ちらりと部屋の隅の衣装箪笥に視線を投げる。

こうしてみると、けっこう大きい。そう……何かを仕舞い込んでおくには充分なほどの大きさがある。

開けてみればはっきりするけれど――おそらくもう……。

「ドロシーさん、あの……」

寝間着に着替えたアリスが心細そうな顔をする。部屋に戻ってきてポルターガイスト騒ぎを思い出したのだろう。アリスの服は、可愛らしいお菓子がいっぱい散らばった柄だった。服の裾を握りしめながら、ちょっと青い顔をしている。

「大丈夫ですよ。今夜はたぶん幽霊さんは来ないと思います」

「えっ……」

きっぱりと言ったドロシーにアリスが不思議そうな顔をする。

夜更けまでたっぷりとおしゃべりをして、いつの間にかふたりとも寝てしまった。

その夜はそれから物音ひとつ聞こえず。

ふたりとも夜更かしがたたって、昼ごろになるまで目が覚めなかった。

あくる日――休日の朝、というかもう昼だったけれど。ジェニス王立学園内には、ちょっとした騒ぎが持ち上がっていた。

旧校舎の一部が壊されるという事件が起こったのだ。

9.

食堂で遅すぎる朝食を食べていると、ルーアンの街からパープルが帰ってきた。

「あんたたち、まだお昼、食べてなかったの?」

「ちがうわよ」

アリスが言った。

「これ、朝食だもん」

呆れ顔になったパープルがアリスの隣に腰を下ろす。

「ま、いいけどさ」

「間に合ったの?」

「一応ね。世紀の傑作よ。『王立学園に潜む魔獣ウーライ・バーチャの復讐は血の惨劇の夢を見るか?』っていう、痛快ホラー青春アクションなの」

アリスもドロシーも言葉を失った。

「そ、そうなの?」

「スゴイデスネー」

とだけ返す。

「エンターテインメントに徹したわ。イマドキ、暗くて陰気な作品なんて、誰も読まないと思うのよね!」

充分、暗くて陰気なタイトルに思える――とは言いだせなかった。

きっと本人の中では明るく楽しい痛快アクションなんだろう。

想像もできないけれど。

「このために遊撃士の魔獣手帳と遊撃士（ブレイサー）手帳と釣り手帳を写させてもらって読み込んだの! 資料集めから勝負は始まるのよねー」

「釣り手帳って読む意味あるの?」

「リアリティってやつよ!」

アリスが納得いかないという顔になった。ドロシーも同じ気持ちだが、まあ、作家の頭の中なんてどこでどう繋がっているのかわからないし。そういえば、ナイアル先輩も役に立つのか立たないのか不明な本をよく読んでたっけ。『子育て上手のママになる方法』とか。ナイアル先輩にもっとも縁のなさそうな……。

「ところで、何かあったの?」

食堂のあちこちでひそひそと噂話が繰り広げられている。周りを見回しながら、パープルが少しだけ声を潜めて言った。

「旧校舎がまた立ち入り禁止になるかもって」

「あら」

「旧校舎って、あの、柵の向こう側の建物ですよね?」

ドロシーが尋ねると、アリスもパープルも頷いた。

ジェニス王立学園の敷地の東側には、張り巡らされた囲いの向こうに古ぼけた校舎が建っている。今の校舎ができる前に使われていたものだ。老朽化してしまい、魔獣が棲みついたりなどもあって、危ないからと立ち入り禁止になっていた。

ドロシーが前に学園を訪れたときは、幽霊が現れるというので出入りできる扉には鍵が掛けられていた。

「遊撃士さんが退治してくれたから危険はなくなったはずなんだけどなー」

「何かあったの?」

パープルに問われて、アリスが答える。

「旧校舎の裏庭に面した窓の一部が壊されてたんだって」

ドロシーもアリスも先ほど知ったばかりだ。食堂に来て、ざわついている人たちに訊いて教えてもらった。

鍵が新調され、当直の守衛を雇うことも検討しているらしい。

「また、何か出たのかな?」

パープルが言って、アリスの顔が引きつった。

「ちょっとやめてよ。せっかく寮に出なくなったと思ったのに」

「出なかったの？」

「久々にぐっすり眠れた」

「それで今頃になって朝ごはんなのか。そういえば、ドロシーさん、泊ってたんですね」

「はい。大きなお風呂も堪能させていただきました〜」

「別に一晩じゃなくても、ずーーーっと泊ってくれてもいいですよ！」

「無理を言うんじゃないわよ、アリス。ほら、ドロシーさんだって困ってるじゃないの」

「まあ……。ああでも、できればもう一日泊めてもらえればって……よろしいでしょうか」

ぱあっとアリスの顔が明るくなった。やはりまだ心細かったのだろう。

「まだお仕事が？」

パープルが言った。

「それもあるんですけど……」

昨日も今日も色々あって、食堂メニューに使う写真をまだ選んでもらっていない。

けれど、それだけではなかった。

「ポルターガイストなんですけど――」

ぎくり、とアリスが身をすくめる。

「たぶん、今夜には片がつくと思うんですよぅ」

「片がつく？」

「はいー。ところでパープルさん。小説家に大事なことってなんだと思いますか」

「観察……かしら」

「ですよねー。じゃあ、今夜、肝試しをしませんか？」

パープルが好奇心満々の顔つきになり、アリスが顔を引きつらせた。

10.

その日のドロシーは忙しかった。

まずは食堂のデボラに相談して、メニューに使う写真を選んでもらった。

食堂には前回からのわずかな時間で新しいスイーツが増えていたけれど、パンプキンパイは甘すぎ、シナモンティーは癖が強すぎると、男子生徒たちからは不評らしい。メニューに加わるかどうかは微妙なところだ。

それから、ルーアンの街に滞在するナイアル先輩へと連絡を取る。学園のオーバル通信機を使用させてもらって、ホテルへ繋げた。帰るのが一日遅れてしまうから心配かけるとまずい。

驚いたことに、折り返しですぐに連絡が入った。手渡された通信文を読む。

『オマエガ珍シク気ヲ回シタノガ心配ダ。雨デモ降ルンダジャネエカ？』

と、書いてあった。

「……何でしょう。この言いようのない脱力感は」

心配するかもと思ったのは確かだが、こういう心配をされたかったわけではない。

「いや、絶対これ、心配してないですよねー」

思わず独りごちた。

それから、学園内のあちこちをカメラ片手に見て回る。

こういうときカメラマンは得だ。カメラを手にしていればうろついていても怪しくない。

旧校舎へと繋がる扉は確かに鍵が新調されていた。金属製の柵で取り囲まれた敷地内にあるから、誰も入れない。

というわけでもない。もし、本当に誰も入れないなら、魔獣が棲みつくこともなかったはずなのだ。裏手は森になっているから、どこか柵が壊れているのかもしれない。あるいは地下で繋がっているか。

そのことを相談に学園長室も訪れた。ジェニス王立学園のコリンズ学園長は穏やかなおじいさんで、このままトンガリ帽子をかぶせればおとぎ話の魔法使いか賢者になれそうな人だった。突然の来訪者なのに温かく迎えてくれる。

「なるほどのぉ。確かにそこまで点検はしておりませなんだが……」

「危ないです」

「だが、そもそも夜に学園の外に出る生徒はおらんのです」

あ、なるほど、と思い至る。学園の外は魔獣のうろつく森だ。遊撃士でもなければ、夜に出歩こうと思わない。

「でも、昼は外まで出ますよね？　運動部とか……アーチェリー部、とか」

「鍛錬のために森を走ったりしているようですな。だが、それも決められた安全なコースを走るようにと言い聞かせてありますよ」

ドロシーの不安そうな表情を読み取ったのだろう、コリンズ学園長がつけ足した。

「だが……やんちゃ者はどこにでもおりますからな。わかりました。これを機会に、旧校舎の周りの柵は今一度点検することにしましょう」

縁もゆかりもない一介の通信社のカメラマンの言葉を真摯に聞いてくれるのだから、この学園長さまって良い人だー、とドロシーは思った。

それからひととおり学園内を見てまわる。

休日だけあって園内には人がやや少ない。実家に帰っている生徒も多いからだ。それでも運動部系の部活はいつもどおり、よく聞き取れない掛け声を張り上げている。いつも思うが、あれは何の意味があるんだろうか。学生時代に運動とは縁がなかったドロシーには永遠の謎だ。

先生たちの多くは学園内に住んでいて、溜まった仕事を片づけていた。テストの採点だったり、部活の指導だったり、授業のための資料作りだったり。休日だというのに休んでいない。先生という仕事も大変だ。

学園祭で生徒会が劇を披露するのに使用されたという講堂も寄った。大きな箱型の仕切りのない造りで、床は板張り、正面にステージがある。今は女子の一団がダンスの練習をしていた。

あのステージに立って、エステルちゃんとヨシュア君が劇をしたわけだ。エステルは騎士の役を、ヨシュアは王女の役だったという。

「本物のお姫様みたいってすごい評判だったのよ！」

というのは、前回来たときに同行していた遊撃士エステルの言葉だ。

千載一遇のシャッターチャンスを逃したのが悔しい。

ナイアル先輩はばっちり見たという話なのに。

講堂の片隅を見ると、寝袋が山になっていた。合宿をしているというアーチェリー部のものだろう。モニカはいなかった。そもそもアーチェリー部の生徒たちの姿がない。どうやら別の場所で修練に励んでいるようだ。そういえば弓を引く専用場ってどこかにあるんだろうか？　もしかして、森のほうにあるのかもしれない。

結局、モニカとは会えずじまいで寮に帰る。

空がふたたび茜色に染まっていた。もうじき日が暮れる。黒々とした翼の鳥が一羽、西に向かって飛んでいった。

部屋に戻ると、アリスとパープルが向かい合って話し込んでいた。

ドロシーを見て、ふたりとも身体を向けてくる。

「あ、ドロシーさんっ」

「あの……これ」

パープルが視線を箪笥に走らせながら手を差し出してくる。その手に握られているのは、ぼろぼろになった小汚い毛布だった。

「これは……？」

「言われたとおりに、その箪笥を漁ったら……」

パープルが言った。

「やはりそうでしたかー」

ふたつある箪笥のうち、奥の箪笥の下の段。つまり、モニカとパープルが使っているほうのモニカのほうから見つかったのだろう。

「幽霊……じゃなかったんですか？」

「そうですねぇ」

ドロシーは自分の推理を話して聞かせることにした。

初めに気づいたのは、最初にポルターガイストらしき物音がしたときだ。奥の箪笥を見て、ひとつの段を除いて、服がはみ出しそうになっていた。

「モニカってば、いっつもそうなんですよー。ちゃんとしまえって言ってるのに」

アリスの言葉に、ドロシーは思わず苦笑いをしてしまう。

そういう意味で言ったのではないのだけれど。

「失礼ですけれど、アリスさんに比べれば、モニカさんもパープルさんも、あまり服はもっていらっしゃらないんでしょう？」

「それはまあ……制服があるから」

「ですよねー」

なのに、はみだしそうになっていた。つまり、これは箪笥の中のものを無理に移動させたからではないのか？

おそらくですけれどぉ、と前置きしてから言う。

「モニカさんは部活中に子犬か子猫でも拾ったのではないでしょーか」

ふたりとも驚いた顔になる。

「まさか、ここで飼ってたっていうんですか」

パープルが首を捻る。

「はい」

「家具が鳴ったりとかの夜中の騒音はその拾った子が立てた音だと？」

「そうなりますね」

「それは、いくらなんでも気づくような……」

パープルが言って、ドロシーは首を首を横に振る。

「そうでしょうか？　パープルさんは数日前から原稿を書いてたんですよね？　執筆中は周りがまったく見えなくなるって聞きました。事実、わたしたちが最初、部屋に入ってきたときもそうでしたよ」

「うっ」

「でも、あたしもいたのに」

「アリスさんは本当だったら気づけたはずです。けれど、昨夜もそうでしたけれど、音がしたとき、怖がって、絶対に音のほうを見なかった」

「あ」

ふたりとも絶句した。

「でも、それなら言ってくれればいいのに」

「おふたりに迷惑を掛けたくなかったんだと思います」

寮は原則ペット禁止なのだそうだ。バレれば同室のふたりにも責が及ぶ。
「子犬か子猫だろうって思うのは、モニカさんがしばしば部活を抜け出していたからです。それだけ世話が必要だったんだろうなって。もしかしたら、ケガをしていたのかもしれません」
だが、この休日を利用してアーチェリー部は合宿を行うことになった。
しばらく寮に帰れなくなる。
そこであの日――ドロシーがやってきた日だ――モニカは拾った猫だか犬だかの隠し場所を変えることにしたのだ。
「じゃ、じゃあ、モニカがお風呂を入りにきたとき……」
「はい。まだ箪笥の中にその子は隠れてたんだと思います。わたしたちをお風呂に追いやっておいて、こっそりと連れていった……」
それでモニカがお風呂に来なかったのも納得がいく。
ドロシーの説明に、アリスもパープルも聞き入っていた。
「じゃ、じゃあ、モニカが拾ったっていうその子は、今はどこに――」
「それも見当がついています」
ドロシーはにっこりとほほ笑んだ。
「だから言ったんですよ、肝試しをしましょうって」

11.

月だけが夜空に輝いている。
黒い影がひとつ、鋼鉄製の柵に駆け寄った。
身長よりもわずかに高い鉄の棒へと飛びつくと、足がかりもないのに柵を蹴って自分の身体を持ちあげた。尖った天辺で身体を傷つけないよう身体をひねって飛び越える。
背中には部活で使った弓が背負われたままだった。
モニカだ。
旧校舎へと振り返らずに走ってゆく。
しばらくして隠れていた茂みの中からドロシーたちは姿を現した。
「あの子ったら、部活の道具を置いてくるくらいできなかったのかしら」
アリスが言った。
「それだけ心配なんでしょうね。しかし、鍵をつけたくらいじゃ防げないもんですねー」
モニカの運動能力に、ドロシーは感心してしまう。
「あたしたちはどうするんですか。あの子のマネは無理ですよ」
パープルが心配そうな目をモニカの消えたほうに向けながら言った。
「鍵を借りてあります」
ポケットから鍵を出した。かちゃっという鍵の開く音が夜の中に響く。鉄の柵は握りしめると冷たかった。開ける。
ドロシーたちはゆっくりと旧校舎へと向かって歩いてゆく。
旧校舎の敷地内にはロクに導力灯も点いておらず、まったくの闇がそこここにわだかまっている。ドロシーはわくわくするが、アリスには少々辛いようだ。さっきからパープルの服の裾を掴んだまま離さない。
「ひょっとして旧校舎の窓が割れたのって……」
「モニカさんが割ったとは限りませんが、状況的に何か関連はありそうです」
裏庭のほうへと回ると、確かに窓がひとつ割れている。さらにその窓は開けたままになっていた。無理をすればそこから入れそうだ。
「こ、ここから入るんですか？」
アリスはすっかり怯えた顔になっている。元々、あまり怖いものが好きではないようだし、夜の旧校舎というだけで嫌なのだろう。それに加えてあまり運動も得意ではない。
無理をせずに待っていてくれてもよかったのだが。
「いいえ。行きます。やれと言われれば、よじのぼるくらい。こ、これくらい！」
「正面の鍵も預かってますので、そっちから入りましょう」
あっさり言ったら、拍子抜けした顔になってへたりこんだ。腕を掴んでパープルが引っ張りあげる。
「ふぇぇえ」
「まったく、世話の焼ける……」
「パープルってば怖くないの」
「魔獣は怖いけど、幽霊は別に。だって、元人間なんでしょ。じゃ、夜道で酔っ払いに絡まれる怖さと似たようなもんだと思うし。確実に厄介な酔っ払いに比べれば、害があるとは限らない幽霊のほうが……まし、でしょ」
パープルの斬新な意見にアリスが目を剥いた。
「だってもう死んでるのよ！」
「そりゃ、誰でも一度は死ぬわよ。あれ？　でもそーなると幽霊が成仏するって、二度死ぬことになるのかな？　それは滅多にできない経験だわ。あたしも死ぬときは一度は幽霊になってから死にたいかも」
「ぱーぷるってば～～～やめてよ～～～～～」
アリスが涙目になった。
「あの……もうちょっとお静かに」
いつもナイアル先輩に言われている台詞を自分が言うことになろうとは思わなかった。

ともあれ、それでふたりともがぴたりと口をつぐむ。
正面玄関に廻り、鍵を開ける。
錆びついた音を立てて扉が開いた。
玄関ホールを抜けて、南側の廊下へと出る。その先に中庭へと続くテラスがあるはずだった。
南側から差し込む月の光に照らされて、廊下が青白く輝いている。
数えてふたつめの扉が細く開いていた。
あそこにいる。ドロシーの直観が告げていた。
と、そのときだ。
それまでの静けさを破って慌てた声が聞こえた。「ばか、こら待て！」という叫びの直後に、ドゴン、と派手な音を立てて扉が粉砕される。破片を廊下に撒き散らしながら、そいつが飛び出してきた。
「きゃああ！」
たまらずにアリスが悲鳴をあげてしゃがみこむ。
廊下に後を追って飛び出してきたモニカが、びっくりした顔になって振り返った。
「えっ……アリス？」
「あたしもいるわよ」
パープルが腰に手を当てたまま言った。
ルームメイトたちの邂逅をしり目に、教室の扉をぶちやぶったそいつは、鼻を鳴らしながら、ドロシーと見つめ合った。小さいながらも、そいつは身体の毛を逆立てて、ドロシーを威嚇しようとしている。
ドロシーは己の間違いを悟った。
モニカが拾ったのは、子猫でも子犬でもなかった。
魔獣だったのだ。

12・

とりあえず壊れた扉はそのままに、ドロシーたちは教室へと入る。
魔獣の子どもはモニカが抱えていた。ミルクを飲ませると、あっという間に寝てしまった。今は目を閉じてすやすやと寝息を立てている。後ろ脚の片方とお腹に包帯がぐるぐる巻かれていた。
森をランニング中に拾ったのだ、とモニカが言った。
「ま、魔獣だよ⁉」
「でも、放っておけなかったんだよ！」
ケガをしたらしく、死にかけていたのだと言った。拾った直後はほとんど身動きもしなかった。わずかなミルクだけを飲んでずっと寝ていたらしい。
「ミルク……？　って、ひょっとして食堂のミルクですか？」

ドロシーの問いにモニカが答える。
「そう、だけど。目を覚ますと、こいつ意外と大食いでさ……」
なるほど。それで売り切れてたのか。
アリスが言った。
「水くさいんだから！　わかってたら、協力してあげたのに」
「でも、寮は動物飼うの禁止だしさ……。ばれたら、みんなにも迷惑かけるかなって」
「あたしたち、友達じゃないの！」
「ま、どのみち、あたしは締切明けるまでは何もできなかったと思うけどね」
「……パ、パープルってば！」
アリスが火を噴くような目で睨む。パープルが肩をすくめた。それを見て、モニカがやれやれと苦笑を浮かべる。
ああ、この三人はいつもこうなんだろうな。そう思える瞬間だった。
アリスとパープルはしばらく言い合っていたが、モニカがなだめてようやく話が元に戻った。
モニカは、拾った動物が魔獣だということは見当がついたが、どんな魔獣かまではわからなかった。
「コウリボア……」
パープルが言った。
「ウリボー……なんだって？」
「こうりぼあー、よ、アリス。ウリボアの子どもだって言われてるの。後先考えないで突っ走ることを『ウリボアの突進』って言うでしょ。遊撃士も手を焼く厄介な魔獣ね」
壊れた扉を見ながらパープルが言った。
「ずいぶん元気になってるみたいじゃないの」
「昨日くらいからだよ。元気になるとじっとしてられないらしくってさ」
寝入っているコウリボアを撫でながらモニカが言った。
犬よりもコロコロしていて豚に似ていた。毛皮に縦縞が入っている。脚を縮めて丸まっていると、なんとなく瓜を思わせる身体つきだった。なるほど——だから瓜なんとかって名前なんでしょうか。それとも偶然？
「まさか、窓を壊したのもこの子ですか？」
ふと思いついて聞いてみたのだが、モニカが頷きを返した。
昨夜、コウリボアを寮からこの旧校舎に連れてきたときに腕から逃げ出して割ってしまったらしい。
「まあ、だいぶよくなったからさ。もう、森に帰さなくちゃいけないのかなって……」
少しさみしそうに言った。
「そっか……」
アリスも神妙な顔になった。

　鍵も新調され、見張りもつくかもしれないとあっては、そうそう旧校舎に忍び込むこともできなくなる。それに、そもそも野生の魔獣なのだ。あまり人間の手に馴染むのもよくないかもしれない。

「だからお姉さん、今夜には片がつくって言ってたんですね」

　パープルが言った――正解。

「休日も終わりますから」

　明日からは日常が戻ってくる。

　なんとなくみんな黙ってしまって、寝入っているウリウリした坊やを見つめていた。

　月の影がゆっくりと動いてゆく。

　壊れた扉越しに差し込む明りがのろのろと瓜坊やを抱いたモニカの足下から這い登ってくる。寝ている坊やの顔を照らした。まぶしさに目をしばたたかせ目を開ける。ゴヒッ？とモニカを見上げて啼いた。くすりと抱きかかえたモニカが微笑む。

「よし。森に帰ろうな」

　言い聞かせた。自分に、かもしれない。

「いいの？」

　とアリス。

「いいんだ」

「じゃ、行きましょ。そろそろ寒くなってきたわ」

　二の腕をさすりながらパープルが言った。そっけなく現実的な言い回しが、この子が自分に割り振った役割なのだろう。

　一瞬むっとした顔になったアリスだが、ぷいと顔を逸らして言う。

「わ、わかってるわよ！」

　それを見て、パープルが微笑む。

　友達っていいものだな～、とドロシーは思った。カメラに夢中だったドロシーは学生時代にひとりでいることが多かった。それはそれで後悔していないが、それでも――。

　友達っていいものだ。

　なぜか、遠い街で待っている小言の多い先輩の顔が浮かんだ。

　壊れた扉に応急の修理（椅子と机でバリケードを作った。魔獣が棲みついては困る）をほどこしてから廊下に出た。

「中庭の端に柵が壊れてるところがあるんだ。そこから森に出られる」

　運動部員たちの間では有名な話らしい。

　ときどきサボるために使っている、と言われて、ドロシーは苦笑してしまう。名門ジェニス王立学園の生徒も、やっぱりふつうの学生だったというわけだ。

　廊下から中庭へと出ようと歩き始めたところでそれが起こった。

　翼の羽ばたく音が聞こえて、天井から何かがぶつかってきたのだ。

「うわあ！」

　モニカが悲鳴をあげて倒れる。コウリボアが腕からこぼれた。

「な、なに⁉」

「ボールバット！」

　パープルが息を呑んだ。

13.

　蝙蝠に似た、だが、ほとんど球形の身体をもつ翼ある怪物は、ふたたび天井付近まで舞い上がって、そこで翼を振って留まっている。

　これは確か旧校舎の地下にいた魔獣だ。

　エステルたちがここの地下を探索したときにはついていけなかったドロシーだが、そこで何が起こったのかはだいたい聞いている。

「地下の魔獣はぜんぶ倒してきたって聞いていたのですけれど……」

　だからこそ、ここまでこれたわけで。あまりに遅くなったときの言づけはしてきたものの、ここで魔獣と遭遇するとは計算外だ。

　決して強くはない。

　その証拠に、ドロシーたちの人数を見て、相手は警戒しているようだ。

　一対四。数の上では不利だと思っているのだろう。

　ボールバットの顔がドロシーたちを順に見回している。ドロシーを、モニカを、パープルをアリスを見て、それから一点で視線が止まった。目で見ているのどうかはわからないが、少なくとも顔が向いた。

　そこに、小さな手負いの獣がいる。

　ボールバットは狙いを定めた。

　金物を引き裂くような不快な声をあげ、翼を強く打ち振って飛びかかってくる。

　コウリボアを狙って。

　かばうように人影が動いて、間一髪でウリ坊やをさらって廊下を転がった。

「アリス！」

　動いたのは一番近くにいたアリスだった。転がった拍子に膝を打ったらしく顔をしかめている。しかも、頬にすり傷が走って、血が滲んでいた。

「ば、ばか、なにやってんだよ、アリス！」

　モニカが慌てて駆け寄る。

「だって――」

包帯を巻いたコウリボアを抱きしめながらアリスが言う。

「この子せっかく助けたんでしょ！　き、傷ついたら、モニカ悲しむじゃないの！」

「そりゃそうだ」

パープルが相変わらずの飄々とした言い回しで肩をすくめる。

「けど、アリスが傷ついても、モニカは悲しむと思うよ」

「！　あ……」

泣きながら見上げるアリスの目を見て、モニカが頷いた。

「うん」

「ごめん……」

いい場面だが、あえてドロシーは口を挟む。ここでドロシーまで感激していては、誰も助からなくなってしまう。

「あのー。それで我々が助かるためにですねー」

急襲に失敗したボールバットが天井付近で次の手を練っている。今はこちらの手番らしいから、早急に対処法をとる必要があった。

「なにか、あのボールバットについて情報をお持ちではないでしょうか、魔獣手帳を読破したパープルさん」

精一杯、場をなごませる口調で言ってみたが、よく考えてみると、ナイアル先輩だったら、なごんでいる場合か、と叱りそうだ。

一瞬だけ目を瞑ったパープルが、目を開いてから「確か、暗所を好む、とあったような」と言った。

――暗所を好む。

――ということは、明るいところは苦手、ということでしょうか。

なるほど、それで月明かりさえ避けて、天井の暗がりに逃げるわけか。

「充分です。では、逃げましょう」

三人に中庭の出口へと向かって走るように促す。

「で、でもドロシーさん」

「わたしは最後から行きますから、みなさん合図したら走ってください。いいですね。3、2、1、ゼロですよー！　ほらほら！」

コウリボアを抱えた三人が走り出した。逃がすまいと、天井からボールバットが襲いかかってくる。ドロシーは魔獣の前に立ちはだかり、ポシェットからカメラを抜き取った。

ボタン操作なんて見なくてもわかる。

オーバルカメラの操作盤である導力器を指でなぞり、一瞬で魔法を起動させる。

構えてシャッターを切った。

夜を昼に変える閃光が、愛用のカメラから迸る。

魔獣の影が長く天井に向かって伸びた。

ギャアアアアア！

ボールバットが絶叫をあげた。だが、それでもそいつはドロシーに向かって飛びかかってきたのだ。尖った爪がドロシーの顔を引き裂こうとすれすれまで迫ってくる。

頬を風がかすめた。

目の前から一瞬でボールバットが消える。勢いよく後方へと吹っ飛んでいった。ボールバットの身体の中央に矢が刺さっていた。アーチェリーの矢だ！

「ドロシーさん、早く！」

「わ！　わわわ！　はいぃ！」

――怖かった怖かったあ！

「さすがに今回はダメかと思ったですよぅ！」

わき目も振らずに出口へと走った。弓を構えたモニカと合流し、そのまま中庭へ出る。

ボールバットは追ってこなかった。

モニカの矢で倒されたのか。深手を負って諦めたのか。それとも、月光の下に出てくることができなかったのか。

どれであるにせよ、どれでもよかった。戻って確かめてみる気にはなれない。

今は無事に脱出できたことを喜ぶときだ。

パープルとアリスによって抱えられていたコウリボアと目が合う。くりくりとした黒目に不思議そうな表情を浮かべてドロシーを見ている。

「あなたは、人間を襲っちゃだめですよー」

言い聞かせてわかってもらえるものかはわからなかったが、格闘家と友情を結んだ魔獣もいたことだし、試してみてもいいだろう。

柵の壊れたところから外へと出た。

森の中を四人と一頭でしばらく歩く。

学園からあまり離れると魔獣が出るからと適当なところで止まった。

モニカが、抱きかかえていたコウリボアをそっと地面に下ろした。

瓜坊やはとまどった表情を浮かべ、モニカを見返している。

「ほら」

「行きなってば！」

動かない。

声をかけるのだが動かない。

だが、そのとき街道の脇の茂みががさがさと音を立てて鳴った。

大きな巨体が現れる。

コウリボアをそのまま何倍にもしたような。けれど、特徴的な縦縞はなくなっていて、茶色の毛皮で覆われていた魔獣

だった。

　ウリボアだ。

　くるり、とそのとき初めてコウリボアが背を向けた。たったったと、小さな足を動かして、大きなウリボアの元へと駆けてゆく。

　そのときになってドロシーは思い出した。

　そういえば、学園に来る途中で自分はウリボアを見ている。こちらには目もくれずに山を走っていったっけ。同じウリボアかどうかはわからないが、ひょっとして、ドロシーたちに目もくれずに走り回っていたその理由は……。

　コウリボアが大きなウリボアのところまで辿りついた。

　ふんふんと鼻で匂いを嗅いでから、小さな身体を押しつけている。凶暴さで知られる魔獣が、そのときだけは小さな子のなすがままになっていた。

　それから背中を向けるとドロシーたちから離れていった。

　コウリボアもたったったと後を追う。

　一度だけ立ち止まって振り返った。

「ちび……」

　と、小さくモニカがつぶやいた。

　目の端に光るものが見え、ドロシーは慌てて視線を逸らした。見てはいけない気がしたのだ。

　大きな一頭と小さな一頭は街道を途中で離れると、山のほうに向かって去っていった。

　風が一度だけ強く吹いて、森の葉がざわりと鳴った。

　それでぜんぶ終わり。

　蒼い月だけが街道の砂利を白々と輝かせていた。

14.

「とまあ、そういうわけで三日ほど帰るのが遅れてしまったわけです」

「ま、言い訳として聞いておいてやる」

　ナイアルが言った。

「これも仕方ないことなのですー。ほら、浮世の義理っていうか。年上としての責務というかですねぇ」

「俺にはな――」

　ナイアルが冷め切ったコーヒーに口をつけながら言った。

「話を聞いていて、おまえがしっかり者に見えるってのが納得できん」

「ひ、ひどいことを！　あんまりですよぅ！　ルーアンのホテルで待ち続けて、ナイアル先輩はきっと精神がささくれだってしまったんです」

　そう言ったら、ぎろっと睨まれた。

　先輩の机の上には、原稿が山となって積まれている。あれだけの量を自分が学園に行っている間に書いたのだろうか。いつもの三倍くらいはありそう。

　――もしかして、自分がいないほうが原稿が進んでる？

　恐ろしい考えに思い至ってしまって、ドロシーは慌てて首を振った。

「で？」

　ナイアルが言った。

「で、とは？」

「そのあと、どうしたんだよ」

「あー、いちおう翌日に四人で学園長さんにぜんぶ報告しました」

　実際には帰ってすぐにドロシーは学園長室を訪れている。帰りが遅くなったときの万が一を考えて相談してあったからだ。ただ、夜も遅かったから、全員が無事だったこともあって、詳しくは翌日と言って寮に戻った。

　旧校舎の柵の壊れた箇所は修理されることになったし、遊撃士を呼んで、魔獣の残りを駆除してもらう手配もされることになった。

　ただ、拾ったのがウリボアの子どもだということは黙っていた。魔獣を拾ったなんて知ったら卒倒してしまう。野生の猫だったということにした。

　事情を知った学園長は理解を示してくれたものの、危険なことに首を突っ込んだからと、三人娘に三日間の補習を課した。まあ、それくらいで済んで幸いだ。

　三人娘を返してからドロシーにもお説教がきた。まったくあなたは大人でしょう。子どもと一緒になってうんぬん、と。それも仕方ない。甘んじて受けてきた。最後に、でもあの子たちの面倒をよく見てくれましたと礼を言われ、やっぱり良い人だと思うドロシーである。

「で、これが矢で吹き飛ばされる直前のボールバットの写真でして」

　至近距離からのフラッシュで色が飛んでしまって出来はあまりよくないのだが。

「おまえ……ちゃんと撮ってたのかよ」

「はい。ほら、ちゃんと瞳にハイライトが入ってるでしょ」

「モンスターが生き生き取れても意味ねーだろ！　てか、俺の写真はこの魔獣以下だって言いたいのか、おまえは！」

「まあ」

「おいこら」

「冗談ですってばぁ。やだなあ。センパイ」

　おまえが言うと冗談に思えないんだよ、とナイアルが言った。

「まあまあ、気を取り直してください。で、こっちがコウリ

「ボアを帰す直前の記念写真です」
森の中。コウリボアを抱えているモニカの写真。
モニカの両脇にはパープルとアリスがいる。
「どーすんだよ、これ。教師たちには見せられねーんだろ」
「だから、こっそり送ってあげようと思ってるんですよぅ」
三人ともが笑顔だ。
フラッシュに光る瞳にはハイライト。
たぶん、一生忘れない。
しばらく写真を眺めていたナイアルだったが、指ではじいてドロシーに返した。
「ま、いいんじゃねーか。よく撮れてるし」
「ありがとうございます」
「誉めてねえ」
「今、誉めたじゃないですか」
「聞き間違いだ」
まあ、こういう先輩だとドロシーは知っている。
「何笑ってんだよ。しかし……ポルターガイストの正体が拾った魔獣の子だったとはな。面白いが、新聞ダネにはならねーなあ」
ナイアルが言ったので、ドロシーはすかさず訂正した。
「そうでもないです」
「は？」
「実はですね。ひとつだけおかしなところが残ってるんですよ」
「おかしなところ？　さて、聞いてたかぎりじゃ、わからなかったけどな」
ナイアルが首を傾げる。
「気づきませんでしたか？　アリスさんが言っていたじゃないですか。物音を聞いた子が寮にはけっこういるって」
「ああ。そういや言ってたな」
「でも、コウリボアがいたのはアリスさんたちの部屋の箪笥の中だけ。そこでの物音なんて、そんな遠くまで響くでしょうか？」
「え？　おい待て」
「寮の反対側に部屋がある生徒からもわたし聞いたんですよね。確かに家具が鳴る音がしたって」
ごくり、とナイアルが唾を呑んだ。
「おいまさか」
「まあ……。怖がるだろうから、彼女たちにはこのことを明かせないんですけどねー」
「お、俺が怖がるのはいいのかよ！」
もちろん、とドロシーはにっこりとほほ笑んだ。
ナイアル先輩だから言えるのだ。

人生半キャラずらし



jdkバンドのドラマー・オカジがファルコムと音楽と人生について熱く語ります！

「PERFECT COLLECTION SORCERIAN Vol.1」

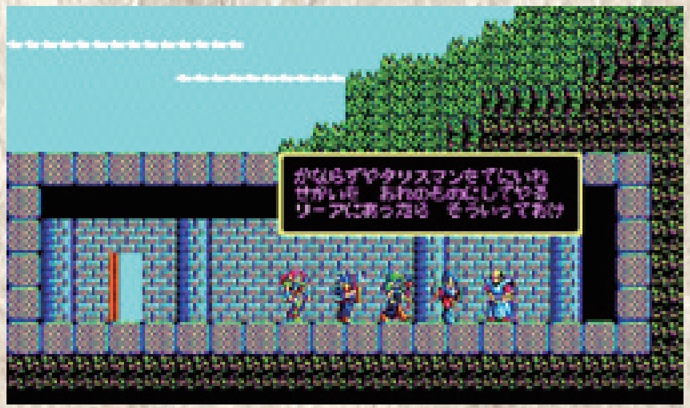
みなさんこんにちは、jdk BANDドラマーのオカジです。気がつけばもう12月。師走とは良く言ったもので、僕もライブやらリハーサルやら制作やらで日々バタバタと過ごしております。しかもめちゃくちゃ寒いし……。もうすべてを投げ出して南国にでも逃避してしまいたい気分ではありますが、今回も人生半キャラずらし、はりきって参りましょう！

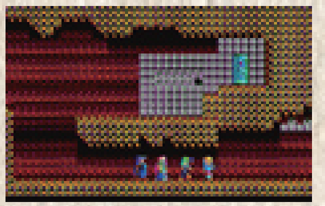
さて、今回ご紹介したいアルバムはこちらであります。ドドン！

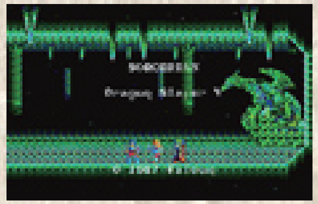
「PERFECT COLLECTION SORCERIAN Vol.1」

Ys 25周年で世間は賑わいを見せておりますが、実はこのSORCERIANというゲームも今年で発売25周年。1987年の発売当時は、その画期的なシステム、シナリオ、音楽、グラフィック……すべてにおいて他の追随を許さない圧倒的な存在感で、ゲームシーンを圧倒したタイトルでした。ただ、PCというプラットフォーム専用作品であった部分も含め、誰もが気楽に楽しめるというようなものではなく、また、当時小学生であった僕には、魔法の生成方法や、キャラクターの細かいパラメーターの育成がとても難しく、何よりPC自体を持っていなかったので、友人の家で多少プレイさせてもらった事はあるものの、「消えた王様の杖」をなんとかクリアできた程度でした。

そんなわけで個人的に言えば、このゲームは、年上の友人がプレイしているのを横で見ていたのがほとんどだったのですが、その音楽の素晴らしさは、小学生の僕の心にも強烈なインパクトを与えてくれたのでした。







「PCは持っていないからゲームはプレイはできないけど、音楽だけでもいいからちゃんと聴いてみたい！」

小学生の僕は、そんな想いを胸に、近所のCD屋さんに足を運びます。

するとゲームミュージックコーナーの棚に、この「PERFECT COLLECTION SORCERIAN Vol.1」が置いてあるではないですか！　このアルバムがどういうコンセプトで作られているのか、どういう内容なのかなどという事はまったく気にせずのタイトル買い。ソーサリアンのCDであればなんでも良いから欲しかったのです。

今思えば、ここでミュージッククフロムソーサリアンを買えば順当な流れだったのでしょうが、なんだかこっちの方が2枚組みでカッコイイし豪華だし、SORCERIAN SUPER MEGA MIXとかいう強そうな名前のアレンジバージョンが入っているし、なにより、うちの地元の小さいCD屋さんで見つけたこのアルバムを早く自分のものにしてしまいたかった。（なんだそりゃ）

……というわけで3800円という小学生にはなかなか高価な代物を、清水の舞台から飛び降りるつもりで思い切って購入。

「大枚叩いて買ったこのアルバム、何がなんでも楽しみ尽くしてやる！！」と、凄い勢いで聴きこみまくります。

「あー！　これがソーサリアンなんだ！」（ちょっと違う気もするが）

「うおー！　砂の城ってこんなオシャレでフュージョンな曲なんだ！」（大分違う気もするが）

「ルシフェルの水門の地下ダンジョンって幻想的でオシャレでかっこいいよね！！」（かなり違う気もするが）

……という、今思えば、かなりの誤認識なソーサリアンへのイメージがこのアルバムによって植えつけられてしまったわけです。大分時が経ってから、砂の城の原曲を聴いた時の衝撃たるや……（笑）。

でも実は、今でもこのアルバム



岡島俊治（Okaji）



1979年6月9日生まれ
ドラマー/パーカッショニスト/作曲、編曲家/プロデューサー
洗足学園短期大学器楽科打楽器専攻卒業。
2000年、ロックバンド『HeadPhonesPresident』のドラマーとしてデビュー。
2005年、同バンド脱退後はフリーミュージシャンとしての活動を開始。様々なアーティストのサポート、レコーディング、プロデュース等を行う。
2008年より『ファルコムjdkバンド』に参加。
主な共演歴：jdk BAND、Sixh.Opera、HeavensDust、野宮真貴、植村花菜、CORE OF SOUL、DENIAL、安藤禎央、清田愛未、中村幸代、一純悠人、momokomotion、越尾さくら…etc



の「砂の城」と「地下ダンジョン」、大好きなんですよね。原曲を思えば「やりすぎ」なアレンジな感は否めないわけなのですが、音楽という視点からフラットに見た時のアレンジの完成度、楽曲のクオリティーは、今聴いても素晴らしいと思っています。それに僕にとってのソーサリアンの原体験は、ある意味このアルバムだと言っても過言ではないので、色々な思い出補正もかかっているのかもしれないですけど（笑）。

そんなわけで年内のコラム「人生半キャラずらし」は以上でおしまい。

今年から始まったこのコラム、毎度、拙筆、乱文にお付き合い頂いて本当にありがとうございます。ツイッターを通して感想を頂けるのも、本当に励みになっております。毎回はお返事は書けなかったりしますが、読者の皆様の声こそが執筆の支えになっております。

また来年も皆様と楽しくファルコム作品を愛でていけたら嬉しいです。

今後とも応援のほど、宜しくお願い致します！

それではまた次回お会いしましょう！ 良いお年を！

ファルコム楽曲4,000曲をiTunesで
世界50ヶ国に配信中。
(ファルコム楽曲はすべて高音質化、DRMフリーが適用されたiTunes Plusでの配信となります)

iTunes配信中のコラム関連アルバム情報
[PERFECT COLLECTION Dragon Slayer 英雄伝説]
価格：3,000円
収録曲数：36曲

≪Falcom jdkバンドライブ特設サイトURL≫
http://www.falcom.co.jp/jdk/index.html

コテ放題

コテカナことjdkBANDボーカル小寺可南子がゲームと共に、好き放題な日々のことを描くコラム!!

第0回　小寺可南子改造計画　始動!?

▶PROFILE



日本ファルコムのゲームソングを奏でる専属バンド "jdkBAND" のボーカル。webラジオ「ファルコムラジオ " めんどくさいです…でもがんばります "」では声優水橋かおりさんと共にパーソナリティをつとめる。その他CMソング、ジングルなど活動は多岐に渡る。
twitter @cana_ko_tera

みなさま、どうも初めまして！ コテカナこと小寺可南子です！ 突然ですがここでちょっと歌わせてください！「ファルマガ連載を手に入れた～♪」（↑イースの宝箱を開けた時のメロディーで）……という訳で、自分でもまだ何が何だかよくわかっていないのですが、ファルコムマガジンさんで連載を持たせていただけることになったようなのです！ しかもファルコム作品をゲームレポする的な！ なんということでしょう。自慢じゃないですが私は大のゲーム音痴なのです。東と西の区別もつかないですし不安いっぱいです（↑ゲーム音痴以前の問題）てゆうか……ゲ、ゲームレポ!? って何ですか??

教えて編集長さーん!!







2011年10月から好評配信中のWEBラジオ『ティオのファルコムラジオめんどくさいです…でもがんばります』の舞台裏をこっそりお届け♪

ティオのファルコムラジオめんどくさいです…でもがんばります
■配信日　毎週金曜日、公式HP、ランティスラジオ、ニコニコ動画にて更新。
■メインパーソナリティ　水橋かおり（『碧の軌跡』ティオ・プラトー役）　小寺可南子（『ファルコムjdkバンド』ボーカル）
■公式ホームページ　http://www.falcom-radio.com/

第58回-第59回　菅沼久義（『空の軌跡』ギルバート・スタイン役）

58、59回のゲストは、ある意味で『軌跡』シリーズの中でも屈指の人気を誇るキャラクター・ギルバートを演じられた菅沼久義さん。エステルたちの敵役として登場しながらも憎み切れない性格や、攻撃を受けた時の声が「あわび！」と聴こえることからネタキャラと愛されており、お便りもかなりの数が寄せられた回となった。ゲストパートでは、戦闘用のボイスしか収録していないにも関わらず、ギルバートを理解し、愛する菅沼さんによる、愛のある「あわび」トークが繰り広げられた

▶第58回-第59回の舞台裏◀

58回からスタートされた『出発！特務しれん課』コーナーでの、支援課見習いふたりによるリベール王国の紹介ナレーション。お互いにネタが被らないようにと牽制しあい、探り探りながらも達成感のある表情を見せた姿が印象的だった。そしてその試練は次回へと続く。

第60回-第61回　白鳥由里（『イース セルセタの樹海』リーザ役）

60回、61回のゲストは、『イース セルセタの樹海』でリーザ役を演じられた白鳥由里さん。1993年に発売された、『イースⅣ The Dawn of Ys』（ハドソン）から、ファルコムが作る初めての『イースⅣ』にあたる『セルセタの樹海』へと、引き続きリーザを演じられているということで、約20年振りに収録をした時の心境や、どのように演じていこうと思っていたか、という白鳥さんの持つ「リーザ像」という話題を中心に盛り上がった。

▶第60回-第61回の舞台裏◀

61回で突如読まれた一通のお便り。それはなんと、本誌で『みんな集まれ！ファルコム学園』を連載中の新久保だいすけ先生のものだった！　これは担当編集もまったく知らない出来事で、完全に新久保先生がみずからファルコムラジオに投稿したドッキリ展開だったのだ。



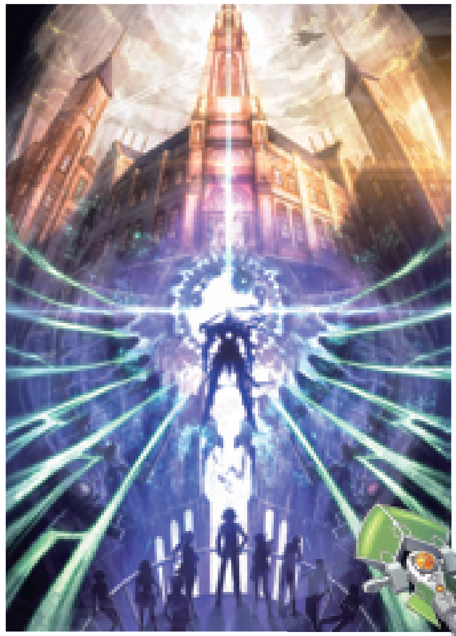
今月のコテガキ

毎週更新とともに発表される、小寺さん直筆の「コテガキ」を少しだけご紹介！

▶ファルコムニュース◀

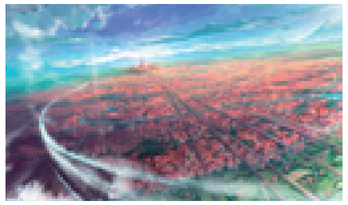
ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

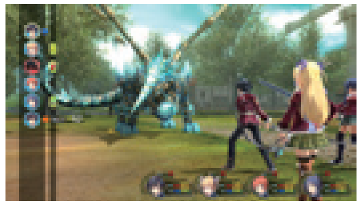
日本ファルコム完全新作がついに発表!
その名も『英雄伝説 閃の軌跡』!!



舞台はエレボニア帝国へ!

2004年の発売以降今なお売れ続ける超ロングセラーにして「軌跡」シリーズの始まり、『英雄伝説空の軌跡』の世界、ゼムリア大陸。大陸の西部に存在する帝国・エレボニアから今回の物語は始まる。PlayStation® 3、PlayStation®Vitaでは初となるオリジナルタイトルの本作では、ファンにはお馴染みながらいまだ謎の多い帝国での新たな「軌跡」を体験することができるぞ！





個性的なキャラクター達を待ち受けるものは……!?







▲よりスピーディーになったコマンドバトルや様々な場面でドラマを彩るキャラクターボイスなど、あらゆるシステムが大幅に進化！

※画面は開発中のものです。　※ゲームシステムは仮のため、製品版とは仕様が異なる場合があります。



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.23

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 大場恵美子
デザイン・DTP	さとうだいち
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（ビーニーズ）
発行	株式会社フィールドワイ 〒 101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/
制作・販売協力	シナノ印刷株式会社

FALCOM MAGAZINE SPECIALプレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！



❶ファルコムjdkバンドボーカル・小寺可南子サイン色紙

ファルコムマガジンの読者へ、コテカナからお馴染みオリジナルイラスト付きの年賀状！　今月から始まった新連載も絶好調!?



❷空の軌跡外伝 レーヴェ物語　１＆２巻セット

いよいよクライマックスを迎える人気コミック『レーヴェ物語』をセットで！　気になっているお友達にオススメしてみるのもいいかも？

❸零の軌跡Evolution クリアファイル

先月に続き、特典で封入されたクリアファイルを特別プレゼント！　何のイラスト当たるかはお楽しみ！

1名様 3



プレゼントの応募方法

こちらのアンケートの回答を下記のアドレスまでメールにてお送りください。
プレゼントの当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

- ●下記のメールアドレスをご記入ください。
- ●「vol.23プレゼント係」とご記入ください。
- ●お名前（ペンネーム可）をご記入ください。
- ●右記の記事一覧から、今月号で一番面白かった・つまらなかった記事をご記入ください。
- ●ご意見・ご感想などをご自由にご記入ください。
- ●希望するプレゼントの番号をご記入ください。

宛先：
件名：vol.23プレゼント係
○○○○○○○○○○
◆
面白い：
つまらない：
◆
○○○○○○○○○○
◆
1

【記事一覧】

1：巻頭特集株式会社ピラミッド
　代表取締役中野賢氏インタビュー
2：『空の軌跡外伝 レーヴェ物語』
3：『みんな集まれ！ファルコム学園』
4：英雄伝説 空の軌跡
　リベール王国スナップショット
5：英雄伝説 零の軌跡 ～午後の紅茶にお砂糖を～
6：jdkバンドドラマー・オカジの
　人生半キャラずらし
7：ティオのファルコムラジオ
　めんどくさいです…でもがんばりますの舞台裏
8：啄木鳥しんきのファルコム大好き！
9：jdkバンドボーカル・コテカナのコテ放題♥
10：ファルコムニュース

宛先はこちら➡ falmaga@field-y.co.jp　応募締め切り 1月25日

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、賞品の発送のためのみに利用し、その他の目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後３ヶ月を越えて保有することはありません。